
真選組にて咲く花は

天野 キラ☆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真選組にて咲く花は

【Nコード】

N9002Y

【作者名】

天野 キラ☆

【あらすじ】

記憶喪失のところを、近藤さん、つまりは真選組に拾われ——何だかんだで副隊長を任されることになった女隊士のお話。

真選組のメンバーはもちろん、天パやチャイナ娘にメガネ、何故だか敵側のはずの長髪や、え……あの派手な着物の男や三つ綱の兄ちゃんもアリスと関わりが……？

※某サイトで執筆していたものをコピーしてきたものなので、もし
かしたら見たことがあるという人がいるかもしれません。作者の名
前は違いますが、某サイトと同じ人です。

わたくしアリスは、晴れて一番隊副隊長になることができました。

ここの真選組のみなさんは、記憶のない私を預かってくれ、最初は女中にさせるだの言ってたのですがなんだかんだで隊士になりました。……まあ、ここ真選組屯所には、総悟に無理やり連れてこられたようなものなだけ。

最近、隊士として一生懸命頑張ってた私の努力が認められてか、先日、私は真選組一番隊副隊長になることができ、就任式が開かれました。なんだか照れくさかったけど、私が今までよりも真選組隊士として認められたような気がして、嬉しかった。

初めて会った松平のつつあんも、最初は怖い人だと思っていたけど、良い人そうで安心した。

これからも、真選組の隊員として、一番隊副隊長として、頑張るぞ！

就任式が終わった後、近藤さんが、今夜はアリスちゃんを祝って宴会だの言い出した。

みんなが見事に酔いつぶれてきた中、総悟の隣に座っていた私に土

方さんが近づいてきて、口を開いてきた。

「よかったじゃねーか、副隊長になれて」

初めて直接的に聞いた土方さんの祝いの言葉が、私は素直に嬉しかった。

「ありがとうございます、土方さん」

私はなんだか照れくさくて、えへへ、と笑いながら返事をする。

「だがな、月宮。副隊長になったからには、今までよりもきつくなるぞ。女だからって甘やかしたりはしねえ、ビシビシいくから覚悟しとけよ？」

私はこくりと頷いた。

「なあアリス、土方さんに潰されねえように、気をつけろイ。この人Sだから……」

いや、むしろSはあなただから！総悟だから！

「人聞きの悪いこと言ってるじゃねえ！……まあいい、とりあえず今は、飲め。お前の祝いだ」

今までお酒に口をつけていなかった土方さんが飲み始め、私と総悟もお酒を飲むことにした。

……というか私の場合は、総悟に無理やり飲まされた。

お酒を飲んで、顔が火照ってきたのが自分でもわかる。

「総悟、もう飲めない……」

と訴えてみるも、無意味だったようで。

「え？ 飲み足りないって？ しょうがないやつでさア」

そう言って総悟はお酒の入ったコップを私の口におしつけてくる。

「んっんっ！」

ちっがーうと言いたくても、コップをおしつけられているのでうまく喋れない。そして私は仕方なくお酒を飲む。

目線を土方さんに向け、助けを求めようとしたが、そんな私の様子を見て土方さんは笑っていた。

2人とも、ひどい……

先ほど総悟が、土方さんに潰されないように気をつけろだとか言っていたけど、今まさに、あなたに潰されています……

総悟がやけに生き生きしているし、土方さんも珍しく笑っているし、たまにはいいかな、なんて開き直って私は飲み続けることにした。

「真選組一番隊副隊長になったからには、今までよりもずっと俺の側にいなせエ。これは隊長命令でさア」

なんて総悟が言ってきたけど、赤い顔してたもんだから、酔った勢いで出てきた言葉だと思い、適当にスルーしておいた。

そして、いつの間にか私の意識はなくなっていた。

――目を覚ますと、すでに朝がきていた。

近藤さんも土方さんも総悟も山崎も、真選組のみんながどこことなく
幸せそうな顔で眠っている。

私はそんな光景を見てクスリと笑い、とりあえず部屋に戻ることに
した。

――

ついに副隊長になった私に、土方さんに今までよりも厳しくなるだ
とか言われたけれど、副隊長になってからの私の初めての仕事とい
うのは

「おい、俺のマヨネーズとタバコ買ってこい」

「缶ジュース買ってきなせエ、炭酸のな」

……要するに、パシリだった。
しかも総悟まで。

こんなの、ミントンの人にやらせればいいのに、と思いつつ、渋々
ながらも買いに行く私は偉いと思う。

店に入り無事に2つの品を買い終え、後はタバコのみとなり、私はタバコの自販機の前で立ち尽くしていた。

「そういえば、銘柄聞いてないや……」

私はタバコのこととはよくわからなく、適当に自分が気に入ったタバコのボタンを押した。

そして私は今、土方さんにマヨネーズとタバコを渡している。

「おい北条……マヨはいいが、これは何だ」

「何って、タバコですよ？」

「こんな女物のタバコ、吸えるかあああ！」

私が土方さんに渡したタバコの箱は、ピンク色でバラとハートのデザインが入っている、とても可愛いもの。

可愛いものには目がないですよー、と言ってみるもの

「おめーが吸うわけじゃねえだろ！」

という突込みが返ってくる。

こんなの吸えるか、と言ってたわりには、ピンクのタバコの箱からタバコを取り出し、マヨライターで火をつけ、早速タバコを吸っている。

ま、味は悪かねえか。なんて呟いている。なんだかんだで私の買ってきたタバコを吸う土方さんは、優しいな。なんて思ってしまう。

それにしても、土方さんがピンクの箱を持っているのって、なんだか似合わない。

それを口に出して笑いながら言うと、おめーが買ってきたんだろが！と殴られた。

いったあ、せっかく買ってきたのに。まあいいや。次は総悟に渡しに行こう。

そして私は総悟の元へと向かった。

「……何ですかイ、これは。俺は、炭酸を買ってこいと言ったんですがねイ」

「買ってきたじゃん、ほら！」

そう言って私は総悟に手渡そうとするが、総悟は受け取ろうとしない。

「俺が言ったのは缶ジュースの炭酸でさア、これは乾電池の単三じゃねーか」

「そうなの？でもまあ、似たようなものじゃん」

「だいたい、乾電池なんて何に使うと思ったんでイ。ていうか、おめーわざとだろイ」

「何か、充電したいものでもあるのかなー、って」

「おめーの頭でも充電してろイ」

総悟はよくわからないことを言い放ち、もしわざとじゃないと言うなら、こいつはよっぽどの天然でさア。と呟き、総悟は立ち去ってしまった。

ま、そんなところも可愛いんですがねイ。

最後の呟きがアリスの耳に届くことはなかった。

無事におつかいを終わると、なんだか小腹がすいてきた。

「お腹すいたなー」

なんてつい口に出てしまった。ふと、縁側に座り込む。

「今、真選組ソーセイジ持ってるんだけど、よかったら食べる？」

そうやって声をかけてきてくれたのは山崎。近くにいることに気がつかなかった。

私はありがたく真選組ソーセージをもらう。山崎も私と一緒に、横に並んで食べた。

「おいしー。これって、何の肉なんだろう。魚肉かな？」

「真選組ソーセージはね、魚肉60%と、何かの肉40%でできてるんだよ」

「何かの肉って何いい!？」

私の何気ない疑問に山崎が答えてくれたが、何かの肉がとても気になった。すると、いつの間にか総悟も近くにいて

「何かの肉ったら、決まってるじゃねーかい。あの肉だよあの肉…」

なんて言い出す。

なんだか総悟が言うと、怪しい肉に聞こえてくる……

俺にもソーセージくれやイ、と総悟が山崎に言い出し、総悟が私の隣に座り、3人並んで真選組ソーセージを食べた。

けっきょく、今日は副隊長らしいことは何もしなかったけど、こういう日もなんだかいいな、と私は山崎と総悟に挟まれながら空を見上げ、そう思った。

— 2 —
(ヘドロさんとか)

朝目が覚めて、いつものように支度をする。

「それにしても、なんだか寂しい部屋だなあ」

自分の部屋を改めて見て、こう思う。殺風景というか、なんというか。こう可愛いものでも置きたいな。

「お花とか、飾りたいな」

そういえば、万事屋の近くにお花屋さんがあると聞いたことがある。よし、お花でも買いに行こう！私は早速外に出て、花屋へ向けて歩みを進めた。

——というわけで、私は万事屋の前に辿り着いた。

確か、花屋はヘドロの森って名前だって聞いたんだけど、見当たらないな。銀さんなら知ってるかな？そう思い万事屋に入ろうとすると、青い顔をした銀さんが中から出てきた。

「銀さあーん！」

私は上にいる銀さんに、顔を見上げながら声をかける。
私に気づいた銀さんは、私を見た途端に顔色がよくなり、こちらに向かって歩いてきた。

「おう、アリスちゃん。それ……！」

銀さんは私の頭を指差している。

「ああ、これですか？」

銀さんが指差した私の頭のそれは、お花の髪飾り。花びらが大きくて、丁寧に作られている。以前、万事屋にお世話になったときに、銀さんが私に似合うものを選んで買ってくれたものである。本当は私がお礼をしなくてはいいけない立場だったんだけど、でもこのプレゼントは素直に嬉しかった。髪飾りを身につけているところを銀さんに見せたくてつけてきたのだけれど、こうして見せることができてよかったなあと思う。

「つけてくれてんだな、やっぱ似合ってる」

そう言って微笑む銀さん。初めて男の人にもらったプレゼントです

から、大切なんでいつもつけてます。と微笑み返すと、銀さんの顔は少し赤くなった。

あ、そういえばお花といえー……

「銀さん、ヘドロの森って店の場所、わかりますか？私、お花が買いたいんです」

私がこう質問をすると、赤みがかっていた銀さんの顔は再び青くなりだした。顔色がコロコロ変わる、忙しい人だなあ。

「い、いやあ。あそこには行かない方がいいと思うよ？銀さんは今から行かなきゃいけないんだけど……回覧板が、そのヘドロ様のとこに回さなきゃいけないんだよ。こんな時に限って新八も神楽もいやがらねえしよー……」

冷や汗混じりにそう喋る銀さん。

よく見ると、銀さんが手に持っているそれには、回覧板とかかかっている。

「そ、そうだ。一緒に回覧板届けに行かない？むしろアリスちゃんこれ代わりに届けてくれない？」

行かない方がいいと言っていたのに、代わりに届けてきてとはどういうことだ。

「回覧板くらい、一人で届けてくださいよ」

そう言って、私は銀さんの前から離れようとする。

「確かアリスちゃんさへドロの森の場所知りたいんだろ？ ほれ、というわけで、俺についてきなさい！ 頼むから！」

というわけで、なぜだか銀さんとドロの森へと向かうことになった。

ドロの森は万事屋のすぐ近くにあった。

「ひっ」

私は思わず声をあげた。

緑色で鬼のようにおっかない顔をした人物……天人が、店の前にいたから。

ライオンのようなたてがみが高等部から首の周りを覆い、側頭部からは水牛のように湾曲した角が一对生えている。

そんな人物がお花に水やりをしているのだけれど……とにかく怖い。

銀さんの方を見ると、若干震えている。
どうやらあれがヘドロさんらしい。

銀さんは、やっぱり無理イイイと言いながら私に回覧板を押し付けてくる。

私は渋々回覧板を受け取り、まあ、渡すだけならいいかな……と考える。
どうやら銀さんの話しによると、一応彼は優しい性格をしているのだとか。

……じゃあなんで、そんなに怖がってるの？

あ、あの顔だからか……

とりあえず、私は回覧板を持ち、ヘドロさんの元へと恐る恐る向かった。

銀さんは店の看板に隠れて、私の様子を伺っていた。
情けない、男らしくない、と言うと、心に突き刺さったのか、顔を下げてしょんぼりとしてしまった。

なんで、お花を買いにきただけなのに、こんなミッションをこなさなくてはいけないのだろうか。

外見で中身を判断しちゃいけないんだよ、この人優しいんでしょ？大丈夫でしょ？

なんて心の中で何度も思いながらヘドロさんに接近する。

そして私はヘドロさんの前に辿り着いた。背の高いヘドロさんを見上げながら私は言う。

「あ、あああの、初めましてヘドロさん。回覧板をー……」

私は最後まで喋ることができなかった。

……ヘドロさんは突然、私のことを吹っ飛ばしたのだ。

一瞬、何が起こったのかわからなかった。

いつの間にか地面に横たわっている自分自身にびっくりする。

例えるのなら、思考回路はショート寸前状態。

「今のお嬢さん、もう少しで蟻を踏み潰すところでしたよ。いやあ、殺生はいけない」

私の方を見て、目を赤く光らせたヘドロさん。もう私の寿命、縮まったかもしれない。

あなたの足がもし蟻さんを踏んでしまったら、どう落し前つけてくれるの？と、どこかで聞いたことのあるピンク髪ドSお姉さんの歌の台詞が聞こえてきそうな瞳で訴えてきているような気がする。

すると、銀さんがビビりながら隠れていた場所から出てきた。

「す、すみませーん。僕たちィ、回覧板届けにきただけなんですよーそれで僕見てたんですけど、女の子を吹っ飛ばすのはどうかなー、なんて思って、あは、あはは」

銀さんは、私の落とした回覧板を拾い、恐る恐るヘドロさんに手渡していた。するとヘドロさんは

「おやおや、回覧板でしたか。しかし、彼女に痛みを与えるつもりはなかったんですが」

痛みを与えるつもりはなかった？

一撃で仕留めるつもりだったああ！？

銀さんは心の中であらう思った。

――
アリスちゃんが立ち上がり、俺の方へと近寄ってきた。

「しかし、最近見かけませんでしたね。この頃お顔を見ていなかったの、何かあったのかと心配していたんですよ」

やばい！何かをしようとしている！

「そちらのお嬢さんにも悪いことをしましたね。せっかくだからお二人とも上がっていきませんか？何かご馳走でもしますよ」

やばい！俺たちをご馳走になるつもりだ！！

「大変ありがたいんですが、僕たち忙しいのでこれにて失礼しますーすー！！」

そうして俺はアリスちゃんの手を握り、一目散にその場から走り去った。

回覧板は渡せたし、ミッションコンプリートだ。文句ねえだろ。

「いやいやいや、文句あるから、銀さんあなたヘタレすぎだからあ
！」

「いいんだよ、銀さんはいざという時にキラめくんだからー」

全速力で走って、今はやっと、2人して膝に手をつけ、ぜえぜえ言
いながら休んでいる。
呼吸もだいぶ落ち着いてきた頃に

「けっきょく、お花買えなかったなー」

なんて、口に出る。

「じゃあもっかい戻るか？」

「いや、それはいいです」

「つーか、花ってよおー、別に買ったのじゃなくてもいいーだろ？」

銀さんがそう口に出したが、それってどういう意味だろう。

ほれ、と銀さんの指差す先を見て見れば、そこにはお花が、ムラサキツユクサが咲きほこっていた。

「わぁ……！」

思わず私は感嘆の声をあげる。紫の他に、所々白色やピンク色があって綺麗。

思っていた花とは少し違うけど、小さい庭の花だって生けられると聞くと、私はこの花たちを少しだけ持ち帰ることにした。

帰ったら綺麗に生けよう。

上機嫌で鼻歌を歌いながら花を摘む私を見て、銀さんは優しげに微笑んでいた。

その後、銀さんは屯所前まで私を送ってくれた。

そして私は早速、摘んできた花を生けて飾った。部屋にワンポイントができて満足なのだが、花が少しあまってしまった。

「ちょっと欲張っちゃったかなあ」

余った花を見て、うーんと頭を悩ませる。

これ以上生けたら、ちよつとごちゃごちゃした感じになっちゃうよなあ……

……そうだ！あの人の部屋にも、飾ってこよう。

私はムラサキツユクサを手を持ち、その人の部屋へと向かった。

――

「肘方さーん！いますか？」

「おう、月宮か。つつーか字が違えだろ！」

私は土方さんの部屋の襖を開け、中に入った。

すると、土方さんは書類に目を通し、忙しそうに作業をしていた。私服だから、今日は休みのはずなのに。

休みの日にも仕事をするなんて、流石だな、と尊敬する。あまりにも忙しそうだったから、手伝いますか？と聞いてみたけれど、別にいい、それよりお前は何をしにきたんだ。と返された。

お花を生けにきたんです！と元気よく言ってみれば、土方さんは顔をしかめる。

私は花を生ける作業をしながら、迷惑でしたか？と聞いてみる。

まー、悪かねえな。

と返事がきたから、私は土方さんの部屋に花を飾った。自分の部屋のよりも、綺麗にムラサキツユクサを生けることができた。

「こういうのも、いいものでしょう？」

にこりと笑って土方さんに話しかけてみる。

すると土方さんは、突然私に近づいてきたかと思えば、床においてある生け忘れた花を手に取り出した。

何をするのかと思いきや、無言で私の頭にそっと花を添えた。

「今つけてる花の髪飾りも悪くないが、これも似合う」

なんて無表情で言ってくる。なんだか、なんとなく土方さんらしくない感じがして、声に出してくすくすと口に手を当てて笑ったら、耳まで真っ赤にしてそっぽを向いてしまった。

「花は、好きですか？」

「正直、好きじゃねーな」

予想外の返答に私は思わず目を丸くする。さっきは、悪くないだとか、言っていたのに。

「花は、いつかは枯れちまうだろ。ずっと綺麗に咲いてはくれないだろ」

どこか寂しそうに土方さんは呟き始めた。

その寂しげな横顔は、まるで誰かを思い出しているような、そんな表情をしている。

そんな切ないような苦しいような顔をして、いったい、誰のことを思い浮かべているの……？ 土方さんのそんな表情を見ると、こちらまで胸が締め付けられるような気持ちになってくる。

でもその表情はすぐに変わり、こちらを振り向きながら

「安心しろ。お前の生けた花は嫌いじゃねーから」

と言ってくる。でもその振り向かれた顔はどこか作ったような表情なわけで。

私はその顔を見て複雑な心境になる。

「おい、信じてねーのか、ほんとだぞ」

そう言ってくる土方さんの顔は、いつもの表情に戻っていたので、私は安心した顔を見せる。

その安心した顔を、私が生けた花は嫌いじゃない、と言われたことからきたのだと勘違いしたのであろう土方さんは、ふっと笑い出した。

でもやっぱり、少しだけ見た土方さんの切なげな表情が、頭に焼き付いて、離れなくて。

誰のことを思い浮かべていたんですか？なんて野暮なことも聞く気にはなれない。

そもそも、誰かを思い浮かべていたなんて、私の思い違いかもしれないけれど。

「お仕事の邪魔、してしまいましたね。そろそろ、失礼します」

そうして私は逃げるように土方さんの部屋を後にした。

アリスの出た方を土方はしばらくぼーっと見つめていて、でもすぐに作業へと手を戻した。

ムラサキツユクサの花言葉は

尊敬

ひとときの幸せ

アリスが花言葉の意味を知ってか知らずかはわからないが、土方さんには、幸せを感じてほしい。と願うアリス。

土方は、アリスの生けていった花をどこか優しげな表情で見つめ、それからゆっくりと、タバコに手をのばし、一服した。

―3―（桂に連れられた先は…メイド喫茶？）

「おはようございまぁーす！」

すれ違う隊士達に、私は元気よく挨拶をする。

「あ、おはようございます、ゴリラさん」

「え、ちょ、アリスちゃん？ゴリラさんって何いい！？」

「いやあ、一番隊副隊長になったからには、今までよりも士気を高めようと思ひまして」

「その結果がゴリラさんって呼び方なの！？」

「わかりましたよ、じゃあゴリラさん」

「ラ とればいいってもんじゃないのー！勲怒るよ？」

ゴリラさんとそんな会話をしていると、前から土方さんがやってき

た。

「土方さん！おはようござ……」

「つるせーんだよ、騒々しい。まったく、朝からでかい声張り上げてんじゃねーよ」

「あう、すみません……でも、せっかく副隊長になったというのに、これといった仕事ないんですよ？今日だって私非番だし……」

「それと、でけえ声と関係ねーだろうが」

不機嫌そうな土方さんの返答に、私は思わず頬をふくらます。すると、そこに総悟がスピーカー片手にやってきた。

「おっはようございまぁーす！！」

いつものやる気のない声からは想像もつかないくらいの元気な声で、土方さんの耳元で思いつきり叫んでいる。

「総悟、てめえっ。耳元ででかい声で叫ぶんじゃねーって今言ったばかりだろが！それになんだそのスピーカーは！」

「あ、そうだったんですかイ？ すいやせーん」

「なんだその棒読みは！」

そんな普段どおりの土方さんと総悟のやり取りを横目に、
屯所にいても特にやることがないので私は外へと出ることにした。

「何か、することないかなあ〜」

ふと外を歩いていると、見覚えのある長髪の後姿。桂さんを発見した。

「ヅラァァァ！」

銀さんや神楽ちゃんが桂さんのことをヅラと呼んでいたのを思い出
し、

私も真似をしてみた。

「ヅラじゃない！桂だ！なんだいきなり……おや、お主は」

すごい形相で振り向かれたが、私だとわかると表情が戻った。

「アリス殿ではないか。こんな所で何をしているんだ？」

「いや、あなたこそ、指名手配犯なのに、こんな街中で堂々と歩いて何をしているんですか」

まあ、私は仕事休みなんで、ただ歩いていただけですよ。と質問に一応答えておいた。

『これは丁度いいですよ、桂さん』

桂さんの横を見ると、白い生き物が文字のかかれた看板を手を持っている。

「桂さん？なんですか、この謎の生物は……」

「謎の生物じゃない、エリザベスだ」

「え？生物じゃないの？」

とりあえず、エリザベスって名前なんだ。ところで、何が丁度いいんだろう？

丁度いいって何が？と声に出すと、桂さんは右手で拳をつくり、左の手のひらにポンとのせるといふ動作をした。

エリザベスが桂さんの頭上に電球の絵がかいてある看板を掲げていた。

「どうしたんですか、桂さん」

「いや、実はだな。俺の通っているメイド喫茶が、今日は人手不足で困っているそうさ。一日だけでもいいから働ける若い娘を探しているそうなのだが……」

そう言って、私のことをじいーつと見つめる桂さん。まさかとは思うけど……

「アリス殿。暇ならば、メイド喫茶で働いてみてはどうだ？」

「いやあ、メイド喫茶はちょっと……」

「ちょっと良いかも、とな！よし、早速案内しようじゃないか！俺について来い！」

無理やり私の手を引っ張る桂さん。え？私に拒否権は無いの？

「ちょ、そんなに引っ張らないでくださいい！」

すごい勢いで走る桂さん。そんなスピードで走ってたら転んじゃう、
と思った矢先に桂さんはこけた。

手を繋いでいて、つられて私もこけそうになったが、私はなんとか
立っていた。

「あ、あの。大丈夫ですか？」

「大丈夫じゃない、桂だ……」

私は、繋がれていない方の手を差し伸べ、桂さんを助け起こす。

「アリス殿は優しいな。なんだか、アリス殿のメイド姿を他の奴ら
に披露するのが惜しくなってきた。ここでどうだ、俺だけのメイド
になってはくれないか」

「何がどうだんですか！？もう、変なこと言ってないでさっさと
行きますよ」

別に今日は特段やることはなかったの、
ちょっと抵抗はあるものの、私はメイド喫茶で働くことに決めた。
そして私達はメイド喫茶に辿り着き、私は早速着替えさせられた。

フリルは多いスカートは隊服のやつよりも短いし、メイド服は可愛
いけれど、恥ずかしい。

「おお、想像以上に似合っているではないか、アリス殿！俺が毎日
指名しようではないかハッハッハ」

「いや、働くのは今日だけですよ？」

照れくさい表情をしている私とは裏腹に、私のことを絶賛する桂さ
ん。

エリザベスも『可愛いよ』なんて看板を横から出している。

可愛いって、服がでしょ？

こんな格好してるとこ、知り合いには見られたくないなあ。特に真
選組の皆さんとか。

お帰りなさいませ、ご主人様々という声が聞こえてきて、

どうやらお客様が来たようだ。早速、接客をしなきゃ、とそのお客様たちに目を向けると、見覚えのある黒服姿。

「ななななんでええ!？」

土方さんに総悟。ザキまでいる。なんでこんなところに来てるの!？なんで会いたくない時に出てくるの!？

私は青い顔をして桂さんの方を見ると、桂さんは舌打ちをしていた。

「なぜ奴らがメイドキャフェなんか……エリザベス、退くぞ」

「え、ちょっと待って、桂さあん!」

桂さんは真選組を見るとすぐに、バイビーの言葉とともに、颯爽とその場から去ってしまっていた。

ていうか、キャフェって、バイビーって……

近頃の攘夷志士ってそんな言葉遣いの?それとも桂さん限定?多分後者だろう。

桂さん、行っちゃったし、どうしよう……とりあえず、あの人達に

見つからないようにしよう、と土方さん達に背を向けた瞬間、後ろから声をかけられる。

「そのメイドさぁーん、注文頼みまさア」

総悟オオ！

「しーっ！隊長、俺たちは遊びに来たわけじゃないんですよ」

「なんでイ、せっかくだし注文ぐらいさせてくだせエ。地味のくせに生意気なやつだ」

「地味のくせについて何だよオオ！？」

ど、どうしよう。振り向かないのも不自然だし、でも見られたくないゝなんて思っていると、私が反応しなくて痺れをきらしたのか、肩をぽんと叩かれる。

「聞いてやすか……って、アリス？こんな所で何してるんですア。それにその格好」

「それはこっちの台詞！隊服だし、仕事でなんですよ？そっちこそ

こんな所で何してるの」

もう私は、開き直すことに決めました。

「おい総悟。あんま揉め事起こすな……って、月宮アア!？」

騒ぎ出した私達の異変に気づいて、土方さんまでもがこちらにやってきた。

「おまつ、何してんだ、そんな格好で……」

土方さんは啞えていたタバコを思わず落とし、
驚いた表情で口をパクパクさせながらこちらを見ている。

「だーかーらあー、そっちこそ何やってるんですか! 仕事中じゃないんですか?」

「俺達は、桂小太郎がこの店に通っているとの情報があったから、ここに来ただけだ」

あ、ちゃんと仕事だったんだ。

「副長く？あんまり騒いでいると、桂のやつに見つかって逃げられてしまいますよ？」

山崎が、ソファに座った体制でこちらの様子を伺ってきた。
いや、もう桂さんはとくに逃げているんだけどね。

山崎は私と目があつた瞬間、顔を赤くして固まってしまった。赤くなりたいたのはこっちの方なのに、なんでザキが赤くなってるんだろう。

「ところで月宮、桂のやつ見なかったか？」

私は静かに首を横に振った。嘘をついた罪悪感は少しあるけれど……
：どうせ見たといっても、
今現在の桂さんの居場所はわからないし。

あ、でも。桂さんのせいでこんな格好をしているところをこの人達に見られちゃったわけで、やっぱり見たって言った方がよかったかな？なんて後から思う。

あー、どっちにしろ、今いる場所はわからないんだから、まあいいか。

……それにしても、この3人は必要以上に私のことをじろじろと見てくる。

なんですか、そんなに私にメイド姿は似合わないですか？

無駄に見られて恥ずかしいので、さっさとこの人達の前から離れたい。

「すみませうん、そのメイドさあん、このパフェタダ券使いたいですけどー」

と思っていると、後ろからお客さんの声が。これは、この人達から離れられる理由になる！

「はい、ただい……ま!？」

私は振り向き、そのお客さんの方へと向かったが、私の足は途中でとまった。

「銀さんんん!？」

どうしてこうも、知ってる人が次から次へと。

よく見ると新八君と神楽ちゃんもいて、私の大声に反応して、3人ともこちらを凝視している。

「あれ？アリスちゃん？何してんの、こんなところで」

銀さんの問いに、桂さんに誘われてここで働いていると説明しようとしたが、

土方さん達の前で桂さんの名前を言うわけにもいかないので私は黙っていた。

「おい万事屋ア、こんなとこに来るなんざ、てめえらよっぽど暇なんだな」

銀さん達の存在に気づいた土方さんが、口を挟んできた。

「おやあ、土方君？てめーらこそ、こんなとこでサボリやがって、税金泥棒もいいとこだぜコノヤロー」

なんか、いつの間にか2人の間で火花がバチバチしている。

「おいチャイナ、ここで会ったが100年目ですぜイ。俺と決闘しろコノヤロー」

「あぁん？やんのか、望むところヨ」

こっちもこっちで火花散らしながら睨みあってるし……
私はとりあえず、新八君に話しかけることにした。

「なんだか意外、万事屋の人達も、こういうところに来るんだね」

「いやぁ、銀さんがここのパフェのタダ券をもらってきたんですよ。
珍しくどこか連れてってくれたと思ったら、メイド喫茶というのも
どうかと思いますけどね」

銀さんなら、パフェを独り占めしそうなイメージがあっただけど、
ちゃんと新八君や神楽ちゃんも連れてくるんだ。

「それにしてもアリスさん、とても似合ってますね。メイド服」

「あら、ありがとう」

お世辞でも、可愛い服が似合っていると言われるのは、嬉しくない
こともない。

にこりと笑うと、新八君も少し頬を染めて笑い返してくれた。

なんだか癒されるなあ。……あ、新八君ってザキに雰囲気似てるんだ。

「ぱっつあんよお、せっかく連れてきたってのに文句があるんですか？タダ券だよタダ券。エコロジージャーじゃないの。それに何アリスちゃんとは仲良く会話してんだコノヤロー」

「いや、あんたの場合エコロジージャーじゃなくてエロジージャーですよ」

「それよりアリスちゃん。銀さんのためにパフェ持ってきてくーアリスちゃんの運んできたパフェ食べたい」

銀さんのこの言葉で思い出した。私、一応仕事中だった。なので、パフェを持ってこようと席を立つと、総悟が喋りだした。

「待ってくださいエ旦那。生憎、そいつは俺の言うことしか聞かないメイドなんでさア」

……はい？

「というわけでアリス。さっさとご主人様の靴を舐めなせエ」

そう言って総悟が足を差し出してくるが、もうこれ、メイド喫茶でもなんでもないよね？

「それは聞き捨てならねえな沖田くーん。アリスちゃんは銀さんだけのメイドなんだよー？」

いや、それも違います銀さん。

「ならアリスに決めてもらいましょう。なあアリス。旦那と俺、どっちの靴を舐めるんでイ？」

「どっちも嫌だあああ！」

ていうかなんで、靴を舐めること前提で話しが進んでるの！？

私は助けを求めるべく、山崎の元へと近寄った。
すると、赤い顔でぼーっとしている。

そういえば、店に入った時から、顔赤くなかったっけ……？もしかして熱でもあるのかな！？

「ザキ、大丈夫？ 顔赤いよ、熱でもあるの？」

私は山崎の隣に腰を下ろし、山崎の額に自分の左手を当てる。すると山崎はひどく慌てだした。

「えええ、アリスちゃん！？ なっ、かか顔が近っ……！」

「まあ大変！ さっきよりも顔が赤いじゃない！ 土方さーん、ザキ熱がありますよ！」

私は山崎の額に手を当てたまま土方さんと呼んだ。

「ほお、そいつは大変だなあ山崎ィ……」

なぜだか土方さんは両手をポキポキとならしている。え、なんで？

「山崎、てめえ何してんだー！！」

「ぎゃあああ！」

なぜか土方さんは山崎をボコボコと殴りだした。
なぜだか総悟も山崎に蹴りをいれている。

え、ちょ、病人になんてことを……と戸惑う私の横で、
神楽ちゃんは、男の嫉妬は醜いネ、なんて呟いている。どういう意
味だろう？

「おっと、こんなことしてる場合じゃなかった……どうやら桂の野
郎はいねえようだし、引き上げっぞ。月宮、お前も一緒に帰るぞ。
着替えてこい」

「え、でも。まだちゃんとした仕事してない……」

「いーから早くしろ！」

なんだかよくわからないけど、土方さんに急かされるがまま、
私は土方さんと総悟とザキと一緒に屯所に帰ることになった。

――
――
――

仕事、あんまりしてないんだけど、よかったのかなあ。

なんて呟いている月宮の言葉は無視し、俺達は屯所へと戻ることにした。

月宮が、山崎が熱があるだとか慌てていたが、

山崎に熱なんかねえことを伝えると、安心した顔に戻った。

まったく、こいつは鈍感にもほどがある。

あんなメイド姿のままこいつを、特に万事屋の前に居させたくはなかったから、

思わず連れて帰ってきちゃった。

山崎はボコボコな顔でとぼとぼと俺について歩いているが、総悟は俺の顔を見て睨んでやがる。
ったく、なんだってんだよ。

「土方さん、その手を離しなせエ。アリスが嫌がってんのがわからねえんですかい？」

ああ？手だあ？

俺は自分の手を確認すると、月宮を引っ張る形で手を繋いでいた。

店を出た時から無意識にこの状態だったらしい。

「あ、悪い」

俺は素直に手を離す。無理に引っ張ってしまつて、痛かつただろうか。ふと月宮の顔を見ると、え、あ……と言いながらわたわたとしていて、俺と繋いでいた方の手をぼーっと眺めていた。

「土方のヤローの手も離れたし、アリス、これをつけなせエ」

そう言つて総悟は懷から鉄鎖のついた首輪をちらつかせる。

「えっ、嫌だっ！嫌だつて」

月宮は相変わらずわたわたとしている。

「何で嫌がるんですア」

いや、嫌がらないほうがおかしいだろ。

――
――

総悟、辞めろ。周りの目があんだろ。と土方コノヤローに言われ、俺は渋々首輪をしまった。

なんでイ、なんで土方と手を繋ぐのはよくって、俺に繋がれるのは拒否するんでさア。

気にいらねエ。

でも……そういう態度をとられると、もっといじめたくなりまさア。

アリスは、最近土方に近づきすぎなんでさア。

この前なんか、土方の部屋なんか花を飾りにいったらしい。

……今に見てろイ。俺が後でたーっぷり可愛がつてやりまさア。

だから待ってろイ、アリス。お前は俺だけのモノになれば、それでいいんでイ。

副長はアリスちゃんと手を繋いでいたし、
隊長はアリスちゃんを鎖で繋ごうとしたし……2人とも、すごいな。
いろいろと。

俺は、後ろからそんな様子をじっと見ていた。
手を繋いだりとかじゃなくてもいいから、俺も何かアクションを起
こさないと。

このままじゃ地味がさらに地味になっちゃうよ。

せめて話しかけるだけでも。

「ア、アリスちゃん!! あのさ……!!」

勇気を振り絞ってアリスちゃんに話しかけ、次の言葉を言おうとし
た瞬間。

副長と隊長がものすごい形相でこちらを振り向いたと同時に、2人
分の蹴りが俺にとんできた。

「ぎゃああああ!! なんでえええええ!!?」

俺は吹っ飛ばされながらこう思う。やっぱり、この2人に敵うのは
難しいのかもしれない……

— 4 — (坂本辰馬)

今日は総悟と一緒に市中見回りの日です。ただいま、2人並んで街中を巡回中。

あまりに平和な町並みに、何にも起こりそうにないね、なんて呟いて見る。

「そう次々と何か起こったら、真選組だけじゃ対処できねーじゃねえか。何にもないのが一番でさア」

最もなことを言ってくる総悟。でも、その何かを起こしているのが、総悟の確立が高いのは気のせいなのでしょううか？

何かあったらすぐにバズーカぶっ放したりとかさ。

……でも、やる時はやるんだよね、この人。

「何もないことを確認するのも俺たちの仕事でイ。それに、こうして見回ってるからこそ何も起きないのかもしれないし、いざ何かあった時にはすぐに対処できるじゃねーか」

総悟が珍しくまともなことを……やっぱり、真選組一番隊隊長なだけはあるな。

私も、副隊長として総悟のこと見習わなきゃ。

「……って総悟おお？そんなアイマスクつけてたら、何かあってもすぐに対処できないからっ！！」

さー、頑張っぞーとやる気のない声で言いながらベンチに横たわりアイマスクを装着している総悟。

言ってることとやっтерることが違う！何を頑張るの？少なくとも見回りではないよね、これ。

私は軽くため息をつき、横になっている総悟のことを見つめる。
アイマスクで目は見えないが、口を少しあけて、規則正しい呼吸音をたてながら眠っている。

というか、寝るの早いな。手を胸の下で指を絡ませて交差させており、
そのポーズがなんだか可愛らしい。

「サド王子でも、可愛いところあるんだね」

起きてる時に、可愛いなんて言ったら何されるかわからなくて怖く
て言えないが、
私は眠っている総悟にそっと呟いた。

「わーい、土方さんが切腹したぞー、わーいわーい、ムニャムニャ……」

いや、これほんとに寝てるの？ なんだか寝てるんだか寝ていないんだか怪しい寝言を発している。

「ムニャムニャ、アリスがついに俺に服従しやしたか、さて、何縛りがいいですかねィ……」

どんな夢見てるのおお！？

総悟は夢の中だし、どうしたものかなーなんて考えていると、どこからか、なんとも呑気な喋り方で

「そこのキレイなお姉ちゃん、ちよつとすまんのうー」

と、声をかけられた。

ふとその人の方へ視線を向けると、もじやもじや頭に、サングラスの顔が目に入る。

口元は愉快そうに大きく開かれている。

なんだろう、もしや、ナンパ？

「この辺に、万事屋金ちゃんという店はありませんかのう？道に迷っちゃったきにアツハツハ」

あ、道に迷ってるのか。道案内も立派な仕事だよ、教えなきゃ。……それにしても、道に迷ったってわりには、笑ってるよこの人。

「それなら、私知ってますよ。案内しますね！」

あれ？よく考えたら金ちゃんじゃなくて銀ちゃんだよ？

まあ、いっか。

「おおゝ案内してくれるだか、江戸っ子は親切じゃのゝ！いやあゝしかし、姉ちゃんはなかなか魅力的ぜよ。わしとこれから遊ばんねー？」

「NoThankyouです。ていうか、万事屋に行くんじゃないかなかったですか？」

「おおーそうじゃったきに、アッハッハ。さあいくぜよ！」

さっきからこの人は、私が話しかけてもいないのに次々と話題をふってくる。

そして何がおかしいのか常にアッハッハと笑っている。

名前を聞かれたので、答えておき、一応この人の名前も聞いておいた。

どうやら坂本辰馬さんという名前らしい。

そんな感じで坂本さんと万事屋に向かって歩いていると、何やら怪しい男の人たちが私を囲んでいた。

「その女、真選組隊士とお見受けする」

「真選組隊士が1人で、しかも女ときた。お前さんに恨みはないが、ちいとばかし痛い目にあってもらうぜ」

はあ……またか。隊服を着て見回っていると、こうして襲われることは少なくはない。

坂本さん、少し下がっていてください
。一般人を巻き込むわけにはいかないので、私はこう声をかけ、抜刀しようと手をかけた。

争いごとは好きじゃないけど、真選組隊士がこんな甘いことも言うてられないんだよね。
さて、殺さない程度にやるとしますか……

「おまんら、こんな大勢でおなごを襲うたあ、感心しないきに」

下がってください、と言ったはずなのに坂本さんは私の横から動いていなかった。

よく見れば、懷から銃を取り出している。

「ああ？ なんだお前は！？」

すると、坂本さんはいつの間にか男の横にいて、銃をつきつけていた。

その瞬時の速さに男はもちろん、私も驚いた。

「おとなしく帰るなら、こっちも手は出さんぜよ」

坂本さんのサングラスが少しずれていて、なにかとても強い意思をもつような瞳がちらりと見えた。

男達は何かを悟ったのか、小さく悲鳴をあげ、散り散りに去っていった。

さっきまで私と会話をしていた坂本さんからは、ヘラヘラしていて、ただの能天気な楽天家な印象しか受け取ることができなかった。

この短時間で、この人のことをそんな風に思う私は少し失礼かもしれないけれど。

でも、この人。すごい。
戦いをせずに、敵を追い払った。

……でも、真選組の私としては、今の連中が攘夷志士だったのなら、捕まえなきゃ駄目だったのでは……

「わしは無駄な戦いは好かんきに、勝っても負けても得にはならん」

……！

この人、私と同じ考えをしている。私も、そういう風に思っていた。

無駄な争いは好きじゃない、昔から。

……ん？

昔から？昔って、いつ？

助けてもらわなくてもどうにかなったのは事実だが、
一応感謝の意を込めお礼の言葉を告げる。

「気にするんじゃないぜよ、アハハハハハ」

と相変わらず陽気に笑っていたが、
私は少しだけ坂本さんのことを見直した。

そして、万事屋の前に辿り着いた。

「さ、着きましたよ」

「おお、辿り着いたのもアイスのおかげきに、礼ば言うぜよ」

アイス？もしかして、アリスをアイスと間違えているのか？
……やっぱり、さっきの見直したという気持ちは撤回させてもらう

としよう。

とりあえず、せっかくここまで来たので、私もついでに万事屋にお邪魔することにする。

「銀さん！」

私はそう言いながら、玄関のチャイムを鳴らす。
しかし、何度鳴らしても人が出てこない。

「今日はいないのかなあ」

私があきらめて、戸の前から身を引いた時、次はわしが押すぜよ、と坂本さんが扉の前に立った。

いや、何度押しても同じだと思っただけだな。

そんなことを考えていると、ドタドタという足音が聞こえてきたと思ったら、次の瞬間。

扉は中にいる銀さんによって蹴り倒された。

「っだー！！しつけないだよ！家賃ならまだ払えないって言ってん

だろーが!!」

私は戸から離れていたからなにもなかったものの、蹴り倒された扉は坂本さんに直撃した。

「……って？アリスちゃん？」

「あはは、銀さん。こんにちは」

銀さんは私の存在に気がついたが、坂本さんが下敷きになっているというなんとも言えない状況だったので、

私は苦笑いで挨拶をしておいた。

「なんだアリスちゃんだったのか、まあ上がれよ」

どんだけ家賃を滞納しているんだろう、この人は。と思いつつも、お邪魔することにする。

「き、金時いゝわ、わしもいるぜよお……」

今の声で銀さんは、坂本さんの存在に気づいたはずなのに、ちらりと視線を向けるだけで何の反応もしなかった。

「金時いゝ」

「だーかーらあー！俺の名前は金時じゃなくなつて銀時だつつの！！何度言えばわかんだよ！？つーかなんでお前がここにいの！？」

銀さんは倒れたままの坂本さんをげしげしと蹴り出した。

「久しぶりの再会だというのにつれないぜよ、共に攘夷戦争を切り抜けてきた仲間じゃないか、金時いゝ」

「んな事言うなら、その呼び方辞めろ！仲間の名前ぐらいちゃんと呼べ！！」

……攘夷戦争って何だろう？
……でも、攘夷戦争って。

なんか聞いたことあるな。真選組の屯所とかかな？土方さんとか、攘夷浪士のやつらがどうのって口にしてるし。あ、桂さんも。攘夷活動してるって言ってた。桂さんから聞いたのかな？

まあ、いいや。銀さんの蹴りから解放され、

やっと立ち上がった坂本さんと一緒に万事屋の中へとお邪魔する。すると、新八君が出迎えてくれた。

「アリスちゃんに、坂本さんじゃないですか。今から丁度、お昼ご飯を作るところだったんですよ。よければ食べていきませんか？」

そう言われるとお腹が空いてきたので、お言葉に甘えることにする。

「あのなあ、ぱつつあん。アリスちゃんはともかく、こんな毛玉に飯食わせる必要はないだろうがよ」

「銀さん、こんな頭カラの人でも、せっかく来てくれたんですから。そんなこと言っちゃダメですよ。いくらこんな頭カラな人でも……」

「アッハッハ、泣いていい？」

ちなみに今からカレーを作ります、カレーなら多めに作れるので丁度よかったです。

なんて新八君が言うので、私も手伝うことにした。

「玉ねぎは、キツネ色になるまで炒めてくださいね」

「ねえ、新八君。キツネ色って、本物のほう？それとも写真とかの色？」

「いや、それ2つとも色同じですよね」

楽しく会話をしながら私は新八君とカレー作りをした。

「なんだか、申し訳ないです。ほとんどアリスさんに作らせてしまいましたね……しかし、この前は姉上並みの料理を出してきたものですから、てっきりアリスさんは料理下手なのかと思ってましたよ」

なので手際がよくてびっくりしました。あ、この前のクッキーは絶品でしたよ！なんて言ってくる。

「この前のは、たまたま失敗しちゃっただけだよ。いつもあんなに、黒コゲのもの作っちゃうわけじゃないんだからね」

「ですよね、アリスさんは姉上じゃないですもんね……」

ああ、姉上の卵焼きを思い出すと吐き気がしてきた、なんて言って口元を押さえている新八君。

お妙さんは、それほどまでに料理が下手なのだろうか。

「おい新八いゝ私いい加減、肉の入ったカレーが恋しいアルヨ……これだから新八は……」

「もう神楽ちゃん！文句があるなら食べなくてもいいんだよ。それに、このカレーは、ほとんどアリスさんが作ってくれたんだからね」

「きゃっほーい！！アリスの作ったカレーは例え肉なんか入ってなくても超絶品ね！アリスありがとネー！」

私が作ったと聞くや否や、すぐさま態度を変えた神楽ちゃん。

「神楽ちゃん。何この僕とアリスさんとの態度の違いは……」

「うるさい黙れヨ、コンタクト」

「メガネだアア！！」

「おいお前ら、食事位黙って食えないのかコノヤロー」

「いいじゃないか金時、わしはこうやって皆で騒いで食べる飯は楽しくてしゃーない、アッハッハ」

「お前には一生黙ってもらいたいんだがな。俺は銀時だっつーの」

そんな感じで、5人で楽しく食事の時間を過ごした。

食後は、しばらく5人でのんびりとした時間を過ごした。

坂本さんの話しが興味深かったので、私は真剣に聞いていたが、他の3人は、主に己の欲求のみを語っている坂本さんに呆れているのか、見事にスルーしている。

坂本さんはそんなことは気にもせずに相変わらず笑っていた。

坂本さんは、大富豪の息子で、現在は星間貿易業『快援隊』を営みながら、
気ままに大宇宙を渡り歩いているらしい。

桂さんとも知り合いらしく、桂さんにエリザベスを送ったのはどうやら坂本さんのこと。

争いよりも商いで人を豊かにしようと考えており、利益をもたらす事で天人と地球人の調和を図る事こそが自分が国を守る手段であると考えている、と坂本さんは私に話してくれた。

その思想は素晴らしいと素直に思い、地球外に出たことのない私にとっては、特に宇宙での話しがとても面白く、私は時々銀さんの突込みが入りつつある坂本さんの話しにすっかり聞き惚れていた。ふと窓の外を見ると、夕日が沈みかけていた。面白い話を聞いていると時間が過ぎるのって早く感じるんだな。……神楽ちゃんは寝ちゃってたけど。

「金時！これから飲みに行くぜよ！久しぶりに杯を交わし合おうじゃないかアッハッハ！おまんらも着いて来い、奢るぜよ」

そう言って坂本さんは私と新八君と神楽ちゃんを指差す。眠っていたはずの神楽ちゃんが

「タダ飯！きやつほーい！」

と言いながら起き上がった。

というわけで私達は、外へと出ることになった。

「勘定は陸奥につけとくけー、がんがん飲むぜよ！」

「……と言っても、僕は未成年なんですけどね」

お酒は嫌いではないので、遠慮せずに飲むことにした。飲める時に飲まないかねー

「そこのお姉ちゃん、わしと遊ばんねー？」

坂本さんはさっきからお店のキレイなお姉さんに声をかけては、その度にNoThankyouと断られている。

坂本さんって、女好きなんだなあ。そんな坂本さんに銀さんは突っ込みを入れ、

新八君はその光景を慣れたように見ている、神楽ちゃんにいたっては料理に夢中だった。

私はお酒は少量で辞めておいたが、銀さんも坂本さんも浴びるように飲んでいた。

そんなに飲んで……大丈夫かな、2人とも。

その結果。

帰り道、銀さんも坂本さんもすっかり酔いつぶれていた。そんな2人をしょうがないな、といった感じで支えている新八君と

神楽ちゃん。

すると、前方から声がした。

「まったく、こんなところにいちよったのか。世話が焼けるのう」

その人の方へ視線を向けると、無表情だが美人なオーラが漂う、女の人が立っていた。

「おお〜陸奥じゃなかか！アツハツハ……おえ」

「何しちよるきに、さっさと帰るんじゃ」

「こりゃ参ったの〜わしはもう少しアイスといたいがか〜」

「何言っちよるんじゃ！」

ああ、この人が。さっき坂本さんが話してくれた陸奥さんか。どうやら坂本さんは陸奥さんには頭が上がらないようで、襟元を掴まれてずるずると引きずられていった。

「アイス〜わしはアイスのことが気に入ったぜよ〜！！好きになつてしもたんじゃ、また会」

坂本さんが大声で何かを喋っていたが、陸奥さんにげんこつをお見舞いされ、大人しく引きずられていった。

あたりは、すっかりと暗くなっていた。私もそろそろ屯所に帰らなきゃ。私は、銀さん、新八君、神楽ちゃんに一言いって、帰ることにした。……銀さんはなんだかぐったりしていて、意識がない様子だったけど、大丈夫かな？2人がついていくからいいのかな。

坂本さん、なんだかんだで面白い人だったな。
次に会える時はいつかな？なんて思いながら歩みを進める。

……それにしても私、何かを忘れているような？

私は無事屯所に戻り、部屋でのんびりとしていた。
さつき飲んだお酒のせいかな、まだ頬がほんのりと赤い。

すると突然、襖がすごい勢いで開いて、
驚いてそちらに目を向けると何やら物凄いオーラをまとった人物が

2人立っていた。

「ひ、土方さんに、総悟？どうしたんですか、いったい」

「どうしたんですか、だあ？仕事さぼって酒飲んで帰ってくるたあ……お前もずいぶんと偉くなったもんだなあ、月宮。ああん？」

「おいアリス。寝てる俺を放置プレイたあ、いい度胸してるじゃねーかい。アリスは俺に何プレイをされたいんですかい？」

「え、あ……」

そういえば総悟と仕事だったの、すっかり忘れてたー！
ヤバイ、今、冷や汗がものすごくだらだらと流れている。

「あの……ごめんなさい？」

2人の人物を見上げるため、自然と上目遣いになりながら一応謝ってみる。自分が座っているぶん、相手がいつもよりも高く見えるため、よけいに迫力があるように感じる。

「ごめんですんだら……」

「真選組はいらないんでさア!!」

「きゃあああああ!ほんっとごめんなさ……ってきゃあー!!」

私は2人からお仕置きをくらいました、とき。

―5―（パー子・ツラ子）

「今日は魚かあゝ」

私は今、屯所内の食堂で昼食をとっています。

今日は午前中で仕事終了。攘夷浪士を捕まえたお手柄な私です。

一仕事終えた後の食事は、いいものだ。

おぼんを運んで席について食事していると、すぐに山崎がやってきた。

「隣、いい？」

「うん！」

私は笑顔で答える。

1人で食べるよりも、誰かと食べる方が楽しいから嬉しい。

「私、今日は仕事終わったんだけど、ザキの今日の予定は？」

「俺は、これ食べたらずぐに向かわなきゃいけない場所があるんだ、

だから急いで食べなきゃ……ってアリスちゃん？なに、俺の魚に箸のぼしてるの？」

「だって、この魚おいしかったからもぐもぐ、あ、やっぱりおいしい」

「理由になってないよー!？」

急いで食べなきゃいけないんでしょ？なら良かったじゃん！と言う私に、
まあ別にいいんだけどね……と苦笑いを浮かべながら呟く山崎。

山崎は早く食事を終えることができるし、私はおいしい魚を2つも食べれたし、
こういうのを一石二鳥っていうのかな？

早く食事を終えなきゃいけないはずの山崎が、私の顔を見て、微笑んでいる。

……ちよつと食べづらいなあ。

「そういえば今日は、新しい女中さんが3人ほど入ったらしいね、あの人たちかな？皆きれいな人だね」

と話題を振って見る。

すると山崎は、はっとした顔をして、ああ、そうみたいだね。と相槌をうってきて、それから食事に箸をつけていた。

なんだか変なザキだなあ、なんて考えていると、少し離れた席に土方さんが座っているのが目に入ってきた。土方さんの姿を見て、今日新しく入った女中さん達は、目をキラキラと輝かせながら、様々なことを叫んでいる。

キャー土方さん！
かっこいいー！

土方さん素敵ー！
こっち見てー！

キャー抱いてー！
魚にしてー！！

……こういうのを、黄色い声と言うのだろうか。
確かに土方さんはかっこいいけど、この女中さん達の反応は凄いなあ。

この次の展開が予想できるから、
土方さんを見て騒いでいる女中さん達がなんだか可哀相に思えてくる。

私は食事をしながら、土方さんと女中さんを交互に見ていた。

ていうか、魚にしてー、って何？あやうく嘔き出しそうになってしまった。

……ほら、きた。

土方さんはマヨネーズを取り出して、料理にたっぷりとかけだした。それを見て、怯えたようななんともいえない表情をする女中さん達。さっきまで土方さん土方さんと騒いでいたのが嘘のよう。

私はもう慣れたけど、初めて見るとやっぱりきついものがあるよね。

土方さんは、周りの目などおかまいなしに、おいしそうにほぼマヨネーズを食べている。

ふと横を見ると、いつの間にかザキはいなくなっていた。

これから何しようかな……土方さんは隊服のところを見ると、これから仕事の様子だし。

近藤さんも総悟も見当たらないしなあゝ

そうだ、この前のメイド喫茶。

仕事中途半端で帰ってきちゃったから、一応謝りに行った方がいいかな。

——というわけで私は、メイド喫茶へと向かうことにした。

すぐに辿り着き、店内を見回し、店長らしき人を探すが見当たらない。

適当に、近くにいるメイドさんに声をかけてみよう。

メイドさん1人に伝えれば、それで大丈夫かな？

……それにしても、このメイドさん。きれいな黒髪で顔も美しい。
あまりの美しさにちよつと声かけるの戸惑っちゃうな。

「あの、そのメイドさん」

それでも私は声をかけてみる。

「メイドじゃない、ヅラ子だ」

……はい？

「あれ、まさか桂さんん！？」

「桂じゃない、ヅラ子だ」

「ヅ、ヅラ子さん……なんでそんな格好を」

桂さんは、ロングスカートのメイド服を着ていて、ばっちり化粧もしている。

これがまた、めちゃくちゃ似合っている。
というか、ロングスカートverがあったなら、私もそっちを着たかった。

「うむ、今日も人手不足だというのでな。こうして俺が仕方なく……
…これも攘夷志士の務めだ」

「だったらこの前も、かつ……ヅラ子さんだけがやればよかったんじゃないんですか？ていうか、仕事は選んだらどうなんですか……？」

いや別に、似合っているからいいっちゃいいけど。

「攘夷思想を掲げて志高く生きているが、その収入は常に不安定だ。永続的に活動を続けるためにも、早急かつ潤沢な収入を確保しなくてはいけない」

要するに、仕事を選ぶ余裕はないと？

「ちなみに、今夜は別の仕事が入っている。なあアリス殿、この仕事は丁度今終わるところだったのだ。着替えてくるので、少し待ってはくれないだろうか」

「はあ……まあ、いいですけど」

というわけで私は、桂さんを待つことになった。待っている間に、店長らしき人も見つけこの前の謝罪をしたところ、注意されると思っていたのになぜか褒められ、記念にこの前着たメイド服までもらって、また働きに来てね、なんて言われてしまった。

メイド服なんてもらっても着る機会ないけど……

そんなことをしていると桂さんが現れたので、私たちは外へ出た。
……化粧を落としている。もう少しだけ見たかったかも、ヅラ子の顔。

そして私は桂さんが住んでいるという、長屋へと連れて行かれた。

「ただいま帰ったぞ、エリザベス」

エリザベスは『おかえり』という看板を出した後、
私の姿を発見すると『どうぞ』という看板とともにお茶を出してくれた。

……それにしても、必要最低限のものしか置かれていない。周りを
見渡してそう思う。

「ふむ、拠点を変えても変えても、すぐに真選組の奴らに見つかって
しまうのでな。だから必要な物しか置いてはおらん」

私の心を読んでか、桂さんがそう答えてくれた。

「しかしアリス殿。隊服のところを見ると、今日は仕事のようだが
……俺のことは、捕まえなくていいのか？」

「え、捕まえてほしいんですか？」

今日は仕事は終わったのだが、着替えるのが面倒だったので隊服を着ている。

「いや、そうではなくてだな。むしろ、俺のハートはもうアリス殿にキャッチされてるは同然なのだが、そういうことではなく……」

なんだかよくわからないことを言い出した桂さん。

「前にも言ったじゃないですか。確かに私は真選組で、あなたを捕まえなきゃいけない立場なんでしょうけど、自分を助けてくれた人を捕まえるようなことするわけじゃないじゃないですか」

桂さんがいなかったら、今の私はなかったかもしれない。

そう言っても過言ではないほどのことを、

桂さんにされた——記憶の片隅にぼつりとある桂さんとの記憶。

これはまだ桂さん以外には誰にも話してはいない。

「……それ以外にも理由があるのだろうか？」

鋭いな、桂さんは。

「……私、好きなんですよ。桂さんのこと」

私がこう口を開くと、桂さんは飲んでいたお茶を噴き出した。エリザベスは『なん…だと…』という看板を出している。

「攘夷とか、そういうことはよくわからないけど、何かを信じて、一生懸命行動してる人ってすごいと私は思います」

だから好きなんです、桂さんのこと。と言うと、なんだそういう意味か…と少し複雑そうな顔をしていた。

どういう意味だと思ったんだろう？

でも、ほんとにすごいと思う。まっすぐに自分の道を生きている桂さん。

私と桂さんは敵同士という関係なのかもしれないけど、尊敬できる箇所がある。

私があへへ、と笑うとつられて桂さんもふっ、と笑い出した。

エリザベスが『出かけてくる』という看板を出して、外へと出て行った。桂さんはそれを見て

「いいい？ エリザベス、暗くなる前に帰ってくるのよ」

……お母さん？

でも、目の前にこうして桂さんがいるのに、捕まえないのは、真選組の私としてはやっぱりまずいことなんだろうな。

桂さんと一緒にいる所が、真選組の人達に見られたりしなきゃいけないけど。

「かーつらああ！ ついに見つけたぜイ！！」

って、総悟オオ！？

真選組の人に見られなきゃいい、
そう思った直後に窓の外にバズーカを構えた総悟の姿が目に入ってきた。
メイド姿の時といい、なんでいつも、タイミングが悪いというか何というか……

くっ、ここの場所がバレてしまったか。と桂さんは苦い顔をしている。

「逃げるぞ、アリス殿！」

「えっ、ちょ、待っ！」

私は桂さんの小脇に抱えられた。

逃がすか！と総悟が叫び、バズーカを発射してこようとしたが、私の存在に気がついた瞬間、手が止まった。

その隙に桂さんは煙幕を使い、総悟の目をくらませ、私を抱えながら屋根の上を走る。

「桂さあーん！？私は逃げる必要ないんじゃないですかあ！？」

「なに、このまま愛の逃避行というのも悪くはないな。ハッハッハ！」

「いや意味わかんないいい！！離してくださいよオオ！」

「離してくださいよオオ！じゃない、桂だー！！」

いきなり小脇に抱えられたのと、あまりのスピードに私は軽く混乱

状態だった。

――

「……なんでアリスが、桂なんかいるんですア」

――

「どうやら、追ってはこないようだな」

一通り走ったところで、桂さんは私を降ろしてくれた。
周りはいつの間にか夕日のオレンジ色に包まれていた。

「丁度いい時間だ。俺は今からここで仕事があるのだが、アリス殿。
見学でもしていくか？」

そういえば、夜に仕事があるって言ってたな。
でも、夜にはまだ早いのでは？と疑問に思っていると

「この仕事は準備に時間がかかるのでな」

と付け足した。ここまで付き合わされたし、今日は最後まで桂さんというのも悪くはないかな、と思い少しだけ見学していくことにした。

「じゃあせっかくなので、少しだけ見学していきます」

ここがそうだ、と桂さんが指差す店の看板には『かまっ娘倶楽部』の文字が。

……なんだか怪しい雰囲気をするんだけど、やっぱり帰ってもいいかなあ？

しかし、見学すると言った手前引き返すこともできなく、私は桂さんと一緒に店内へと入った。

店内に入ったと同時に、桂さんは準備があるからと店の奥へと消えてしまった。

え、いきなり1人!?

アゴの出ているオカマさん等の濃い人達がいる初めて来た店内で1人にされたら、

不安でたまらない。

やっぱり帰ろうかなあ、なんて思っていると、見覚えのある銀髪が目に入ってきた。

あれはもしかして……

「あのお、銀……さん？」

「あらやだ、銀さんじゃなくて、パー子よ」

……はい？

「んー？可愛いお客さんだと思ったら、よく見たらアリスちゃんじゃねーか」

「いや、よく見なくてもわかってくださいよ。それよりなんでそんな格好で働いてるんですか？」

「今日は宴会の予約があるとかで人手不足だって言われてよお……
ヅラのやつも来るはずなんだが」

「ヅラじゃない、ヅラ子だ」

銀さ……パー子さんの後ろからひょっこり現れたヅラ子さん。
やっぱりヅラ子さん、綺麗だなぁ。ちょっと悔しいぐらいに。
パー子さんは……可愛いっちゃ可愛いけど、ノーコメントとさせて

いただきます。

「あーあ、だいたい何で俺がこんな格好しなきゃいけないんだか。何も俺じゃなくてもよお」

「何を言う。かつてツートップを張っていた我々がいなくては場がしらけてしまうだろう」

「張っちゃいねえ！一度も張っちゃいねえよ！！」

どうやらパー子さんは不満な様子。

「あのお、ヅラ子さんにパー子さん。ご指名が入ったみたいですよ？」

「「はい」」

「さ、お仕事頑張らなくっちゃ。ね、パー子？」

「そうねヅラ子。負けないんだからっ」

なんだか2人ともノリノリだ。そろそろ帰ろうかなあと店を出ようとすると、
またまた見覚えのあるメガネの人。おさげだけど、流れる的にこの人は……

「新八君？」

「パチ恵でーす……って、アリスさん！？なんでこんな所に!？」

「新八君の方こそ……いや、もうだいたい理由はわかるけどさ」

おおかた、銀さんに無理やり連れてこられたというところだろうか？

「そうなんですよ、いくら人手不足だからって、なんで僕までこんな格好をしなくてはいけないんでしょう」

それに、アリスさんにはこんな格好見られなくなかったな、と落ち込み気味の new 八君。

可愛いよ、なんて言っても複雑そうな顔をするばっつぁん。

今、帰ろうとしていたところなんだ。と告げると、
1人では危ないから、送っていきますよ。と言ってくれた。
それでも一応真選組隊士だから大丈夫なんだけど、お言葉に甘える

ことにした。

「でも、よかったの？ 仕事でたったんだよね」

「いいんですよ、女の子をこんな夜に1人で帰らすことなんてできませんから。それに、僕なんかいなくても、支障なんてないでしょう」

「それもそうだね。新八君地味だもんね。お店からいなくなっちゃって誰も気づかないから大丈夫だよね」

「……いや、確かにそうですけどそこまで言います？」

今夜も月がきれいだ。周りが暗くて、こんな月を見た日には……いつぞやのあの包帯の男のことを思い出す。

会いたいけど、会いたくない。会いたくないけど、会いたい。

怪しい雰囲気にくらくらするような、あのキセルの香り。
……なんなんだろう、彼は。

なんだか心が不安定になってきた。こ

んな状態の時にあの男に1人で出くわしていたらと考えると、今日は新八君に送ってもらえてほんとに良かったなと思う。

気づけば、いつの間にか屯所の前に着いていた。

「それでは僕はここで、またねアリスさん」

送ってくれてありがとう、助かったよ。と言葉を返すと、彼はにこりと微笑んでくれた。

今日はあまり活動していないはずなのに、なんだかひどく疲れた。

私は部屋に入り着替えを終えるとすぐに倒れるように床に横になった。なんだか異様に眠たい。

横になって、ぼーっと襖を眺めていると、その襖がバァンと音を立って突然開いた。

「……総悟？」

何？なんか怒ってる？でも別に今日は仕事はさぼってないし

……むしろ、総悟の方が仕事さぼってること多いし。

なんてことを考えながら腕を組んでつつ立っている総悟を見つめる。

「……今日の昼間。なんで、なんで桂の奴と一緒になんかいたんでさア……」

そうだった。桂さんと一緒にいるところ、見られたんだった。すっかり忘れていた。

やっぱり、一緒にいるのに捕まえなかったことに対して怒っているのかな？

でも、桂さんは私を助けてくれた人だから捕まえるわけにもいかなくて……

しかし、そんなことを真選組の人に、総悟に言えるわけもなく。

敵に助けられたなんてことを知られたら、真選組を辞めさせられちゃう？ そんなの嫌だ。

いろいろ考えていて何も言葉を発しない私に総悟はイラついてきたのか、蹴りをいれてきた。

「いだっ」

実際はそこまで痛くはなかったのだが、思わずそう声に出た。

「答えられねえんですかイ？」

そう言って総悟は蹴りをたくさん入れてくる。
横になったままでは失礼だからとりあえず起き上がろうとしたのだ
が、

立ち上がろうとした足に蹴りが入っているため、立つに立てない。

「ちょ、総悟っ、足辞めて足！」

「嫌でイ」

なんでー！？

総悟は私を蹴ることが楽しくなってきたのか、
いつの間にか少し不機嫌そうだった表情からドS顔に変わっている。

「さっさと言いなせイ、なんで桂の奴と一緒にいたのか」

「言う、言うからまず足辞めてええ！」

「嫌でイ」

だからなんでー！！

総悟は腕を組み私を見下すように黒い笑みを浮かべながら蹴る動作を続けてくる。

あ、ダメだ。なんだか眠たくなってきた……そういえば今日疲れてるんだった。

「いくらなんでも爆弾魔なんかと普通にいたら、真選組の名折れでさア。次からはちゃんと捕まえてくだせエ……ってアリス？」

――

聞こえてくる、規則正しい呼吸音。

「寝てんのかイ」

アリスが寝てることに気がついた総悟は、蹴る足を止めた。

「口開けて寝てらア」

なんだかそんな顔が少しおかしくて、総悟はくすりと笑った。

ドSな笑いではなく、心からの笑い。

「肝心なこと、聞けなかったじゃねえか」

総悟はぽつりと眩き、まあいっか、とアリスの部屋を後にした。

「こいつアちょっと……」

様子を見る必要があるかもしれないやせん。

「あ、アリスちゃん！今から広間で皆で怪談話するんだけど、アリスちゃんも来る？」

屯所内を歩いている時に、こう声をかけてきたのは山崎。

「面白そうだね！行こうかな……あ、総悟」

「なんでイアリス。おめー怖いのが苦手じゃないんですかい？」

「えーっと……確かに怖いのは苦手だけど、怖い話は好きなんだよね。苦手だけどつい聞いてみたいかな？怖いのが好きなのかな」

「……相変わらずお前は矛盾した思考回路を持っているんですねイ」

「2人とも、もう皆集まってると思うので、早く行きますよ？」

山崎がこう言うので、私達は3人で広間へと向かった。

ところで、総悟は怖いのが平気なのかな？

……苦手そうだな。上手くいけば、総悟の怖がる顔とか見れるかもしれないな！

いつも苛められてるから、そんな顔が見れると思うとちょっと楽しみかも。

そのポーカrfフェイスが恐怖に引きつるところ、見てやろうじゃないの。

「……何にやにやしてるんでさア、気持ち悪い」

いつの間にか、私は総悟の顔を見てにやついていたらしい。

「何でもないよ、ふふっ」

そんな私の様子を総悟は不思議そうな顔で見ていた。

広間につき、他の隊士達はすでに集まっていて、私達3人が到着するとすぐに怪談話は始まった。

部屋の明かりはろうそくだけで、怖い雰囲気を出しており意外と本格的だった。

最初は

「俺、鏡とじゃんけんして、一回だけ勝ったことがあるんだ」

という何気に怖いものから始まり

「夜中に廁行ったらノックされた。深夜で誰もいないはずなのに……しかも内側から」

という、1人で夜中に廁に行けなくなるような話など、様々だった。

これぐらいならまだ大丈夫……と思っていたが、ここからどんどん怖い話に拍車がかかってきて、とても耳を塞ぎたくなるような内容のものもあった。

さ、最初の2つは耐えれたけどダメだ。やっぱり怖いよおお……

周りの皆も、恐怖に顔を引きつらせたり叫んだりしていた。

総悟も怖がってるのかな？なんて思い、ちらりと総悟の座っている方へ目を向ける。

……怖がっているどころか、総悟は皆の怖がりぶりを見てにやにと笑っていた。

ろうそくの明かりでしかその顔が見れないから余計に怖い。

私はもう、怖くて涙目状態なのに。なんだか悔しい。
この人、弱点ってないのかな？

山崎はというと、ちゃんと怖がっていた。なんとなく安心。

ザキッ怖いよ……なんて隣にいる山崎に呟くと、
自分も震えながら、大丈夫大丈夫……と軽く頭を撫でてくれた。

「さて、次は俺がいきますぜイ。とーっておきの怖い話があるんで
さア……」

総悟のいつもよりも低めなトーンの言葉に、周りの皆は生唾を飲んだ。

――
――
――

「きゃあアア！！いやあ！怖イイ！！無理イイ！！」

総悟の話しを最後まで聞き終えてしまった私は、あまりの怖さに部屋を飛び出した。

さっきの暗い部屋とは違う、部屋の外の月明かりの明るさに安心し

つつも、

私はある部屋へと向かって走る。

「ひひひ土方さああん!!」

怪談話に参加していなかった土方さんの部屋の襖を思いっきり開ける。

土方さんはとても驚いた顔でこちらを見てきたが、そんなことお構い無しに私は続ける。

「あ、あ、あの、今日、一緒に寝てくださいイー!!」

「はあ!?!」

「お願いします、一緒に寝てください!」

私は涙目で訴える。

「一緒に寝るって、おまっ……!何言ってやがんだ、本気か!?!」

「あのですね、さっきまで、皆で怪談話をしていたんですけど……怖くて怖くて。今日は1人で寝れそうにないんですよ!」

だからお願いします！と土方さんの腕を掴んでみるも、土方さんは急に静かになった。

「……土方さん？」

「く、くだらねえこと言ってんじゃねえ！！」

私の掴んでいた手を振り払い、なぜだか土方さんは急に怒り出した。何もそんなに、顔を赤くしてまで怒らなくてもいいのに……！よくわからないけど、血が上るほど怒らせちゃったのかなあ！？

「あうー……」

先ほどまでに比べたら、だいぶ心は落ち着いてきたが、やっぱり恐怖心が拭えない。

どうしても一緒に寝てくれませんか？と頼んだら、もういいから出てけ、とまで言われてしまった。

何かもういいんだろう、と思い頬を少しふくらませながら土方さんの部屋を見回すと、私の飾った花がなくなっていた。

「お花、片付けたんですね」

いつの間にか口が動いていた。

「ああ」

と、土方さんは何でもないことのように返してくる。

枯れたら処分するのは当たり前なのに、私ったら何を言ってるんだろう。

でも、私の置いていった花瓶はそのままにしてあった。

土方さんは、ずっと綺麗に咲かないから、
枯れちゃうから花のことは好きじゃないんだっけ？ならば……

「あの、土方さん……私が、花になったらいけませんか？」

土方さんは、何を言い出すんだこいつ、とでも言いたげな目で私のことを見ている。

でも構わず私は続ける。

「私が土方さんの、真選組の……花に、ずっと咲き続ける花になります。何があっても枯れないで……そばにいたいんです」

自分でも何を言っているんだろう、と少し思う。

――

「綺麗に咲き続けることができるかはわかりませんが、私はそばでずっと、枯れずに咲きほこっていたいです」

ダメですかね？なんて首を傾げながら聞いてみるアリス。

「……いいんじゃないの別に。というかむしろ……」

真選組の華になら、もうなってるようなもんなんだけどな。

「あのよ、また……花、飾ってもらってもいいか？」

土方は花瓶を手に取り、静かに言う。アリスは一瞬驚く。

「言っただろ、お前の生けた花は嫌いじゃねーって」

それに風情もあるし、なかなか悪くもねえと思えてきたしな。

「……わかりました、今度、飾りにきますね」

アリスは静かに微笑んだ。

「とりあえず、今日はもう出てけ」

こんな夜遅くに、男の部屋になんて来て、どういう気してんだか……

――

え？なんですか？と不思議そうに聞いてくるアリスを、
なんでもだ！と、土方は猫の首をつまむようにアリスのことを掴み、
無理やり部屋の外へと追い出した。

あんま、夜更かしすんじゃないぞ。明日の仕事に支障があったら、
承知しねーからな

そう言って土方はぴしゃりと襖を閉めた。

夜更かし……ん？

いやいや、夜更かしどころか、今日は1人で寝れないんだって！
さっきの怖い話を思い出したら、自分でも血の気が引いていく感じがわかった。

このままじゃ、夜更かしどころじゃなくて、一睡も睡眠できないよ。
1人じゃ怖くて寝れないよ。どうしよう……

土方さんにはよくわからないけれど、断られちゃったし。

頼りになるのは、やっぱり近藤さん？

そう思い、近藤さんの部屋へと向かうが、部屋の明かりはついていなかった。

耳をすますと、いびきが聞こえてきた。

「ね、寝てる……」

どうしよ、もう皆の怪談話終わったかなあ？山崎のところにも行こうかなあ……

怖い話を思い出しながら、とぼとぼと歩いていると、前から総悟が歩いてきた。

「そ、総悟……！」

そうだ、今日は総悟と一緒に寝てもらおう。とっさに私は総悟の腕を掴んでいた。

「なんでイ、いきなり。それよりさっきのアリスの怖がった顔は、爆笑もんだったぜイ。ぶさいくに磨きがかかってやしたねイ」

いつもなら怒るところだが、貶しの言葉は今はアリスの耳には入ってこない。

「そんなことより、今日、一緒に寝てくれない？怖くて1人じゃ寝れないの……」

「……」

あれ？何で黙っちゃうの？

総悟は私の掴んでいた手を振り払った後、静かに手を私の頭にのせた。

「あんたの為に言いやすが、それはできやせん」

なんで？

「じゃあいいもん、ザキの部屋にでも行くか……」

またまた断られてしまったので、私は総悟の横を通り過ぎようとする。

すると総悟は、いつの間にか私の左手を掴んでいた。

「……？」

「黙って俺の部屋に来なせエ」

「……！」

あ、一緒に寝てくれるのかな？

「ありがとう総悟！」

とお礼を言うと、総悟は珍しく困ったような顔をしていた。

なんでだろう？

そして私たちは総悟の部屋に辿り着いた。

「ほんとに助かったよ。土方さんにも断られたから、もしまた断られたらどうしようかと思ってたもん」

私がこう言うと、総悟の顔つきが変わった。

「土方にも頼んだんですかい？」

「うん、一緒に寝てくださいって言ったんだけど……怒らせちゃったみたい。顔を赤くしてまで怒るだなんて」

でも総悟と一緒に寝てくれるみたいだから、助かったよ。と言葉を続ける。

すると、総悟は不意に私のことを抱きしめてきた。

「え……？」

「土方の部屋になんか行くんでねえ……」

私の耳元で囁かれた小さな声。そのどこことなく弱々しい声とは裏腹に、抱きしめる力が強くなってくる。

「え、ちょ、総悟……？」

総悟の様子が変だ。そういう風にされるとなんだか……

「ちょ、痛い痛い！ 苦しいい！ 離してっ 離してええ！」

総悟の手の力がみるみると強くなってきて、終いには私の中から何かが出てきそうな感覚に陥ってきた。今私は、ギュウウウウ！という音が聞こえてきそうな位の強い力で抱きしめられている。

離して、といった私に対して総悟は

「嫌でイ」

なんでー!?

……様子が変だと思ったのは勘違いで、なんてことない、総悟はただのドS野郎でした。

忘れてた。この人、人の嫌がる顔や苦しむ顔見るのが好きだって平気で言う人だった。
きっと強く抱きしめられ苦しんでいる私の様子を見て楽しんでいるに違いない。

頭がくらくらしてきたところで、ようやく手を離してくれ、
小さく咳き込んでいると総悟はさっさと布団に入っていてしまった。

「あ、私も寝る！」

なので、私も続いて布団に潜ることにした。
総悟はなぜだか驚いたような顔をしていたが
勝手にしなせイ、なんて呟いて私のいる方とは反対方向を向いて寝

転んでしまった。

何はともあれ、2人で寝てたら幽霊がきても安心。

私がもう1度、ありがと、と小さく呟いたが、総悟の返事はなかった。

……あれ？もう寝ちゃったのかな？

顔が見えないからわからないけど、私は黙って、向けられている背中を見つめる。

髪の毛、触っちゃおうかな。

そして私はゆっくりと総悟の髪に手を伸ばし、そのきれいな栗色の髪に触れた。

「わぁ、さらさら〜」

少しだけ触れるとなんだか心が落ち着いた。

なんだかもっと総悟に触れていたくなり、私は総悟の腰に手を回した。

「抱き枕みたいで、気持ちいい……」

その温もりに完全に私の心は安堵してきて、それと同時に急激な眠気が襲ってきた。

すー、すー

――

「……やっと寝やしたか」

この天然女。こんな状態じゃ俺が寝れねえじゃねーか……

明日、覚えとけよ。

ところで、なんで俺の顔は火照ってんだかねィ。

―
―
「ふぁ〜よく寝たぁ……ん？」

目を覚まし、ぼんやりとする目でふと横を見ると、総悟が私に抱きつくような形で横になっていた。

「やっと起きたか、おはようございやす」

「いやいや、おはようございやすじゃなくて、離してくれない？」

流石に、抱きつかれているのは恥ずかしいの！なんて私の言葉を総悟はまるで聞いていない。

「ああ〜抱き枕みたいで気持ちいや。こんな状態なら二度寝も悪かねえ」

「〜っ！頼むから、頼むから離してええ！」

照れて顔が赤くなってくるのが自分でもわかる。

「自分は人に平気でするくせに、自分がされると恥ずかしがるって
どういうことさア」

「……え？何それ？ていうか、恥ずかしがってるのわかってるなら、
離してくれない？」

「嫌に決まってんだろイ」

「んゝ！」

昨日ほどの強い力ではないが、軽くじたばたと動いて抵抗してみる
も、

総悟は離してくれそうにない。それどころか、照れてる私の顔を見
て楽しんでいるようにも見える。

私はあきらめて黙ることにした。でもやっぱり恥ずかしくて、いま
だに顔が赤い。

そんな顔を見られているというのもまた恥ずかしい。

――
――

ちよつとした仕返しでさア。しかし、アリスの照れてる顔を見るのは楽しくてしょーがねえ。

離して離してと喚いていたが、最終的には顔を真っ赤にして黙ってしまった。

そろそろいいか、なんて思い俺は手を離してやる。

するとアリスは赤い顔のまま

「……着替えてくる」

なんて言い、そそくさと俺の部屋を出て行った。

すぐに離してくれないだなんてひどいよだのなんだの言っていたが、

むしろ抱きつくだけで終わった俺に感謝してほしいぐらいなんだぜイ？

まあ、アリスが起きる前に、頬に軽くちゅーはしたんだけどな。

はてさて、俺は何をやってるんでしょうねィ。俺も、さっさと朝の支度をするとしやすか。

― 7 ― (スナックすまいる)

「あら、アリスちゃんじゃない」

いつも通りに市中見回りをおこなっていると、お妙さんに声をかけられた。

「あ、お妙さん！こんにちは」

「アリスちゃん、ちょっと聞いてくれるかしら？実はね、うちのスナックすまいるなんだけど、今日は大切なお客様が来るらしいのに、人手が足りないのよ」

困ったわ、なんて言いながら手を頬にあてているお妙さん。

「あら、それは大変そうですね。お仕事頑張ってくださいね」

「まあ！今夜、うちの店で働いてくれるの？流石アリスちゃん！助かるわ！やっぱり持つべきものは友達よね」

お妙さんにはっこり笑顔だけど、私はそんなことは……

「え？ 私そんなこと一言も言ってな……」

「手伝ってくれるわよね？（手伝わないと殺すわよ）」

「!？」

なんか、幻聴が聞こえたような気がしたんだけど気のせいでしょうか……

「じゃあ今夜、スナックすまいるに来るのよ」

私は準備があるからこれで、なんて言ってお妙さんはさっさと去ってしまった。

今夜は特に予定がないし、そこまで嫌じゃないから手伝うのは別にかまわない。

でも……

ちょっと強引すぎます。

それでも、こんな私なんかのことを友達だとお妙さんが言ってくれたの思い出し、

少しだけ笑みがこぼれてきた。

「まあ、いっか」

何事も経験だって聞くしね。

とりあえず私は、

適当に見回りをしながらお妙さんの言っていた時間まで暇を潰すことにした。

そして、あつという間に時は過ぎ、

お妙さんの言っていた時刻になったので私はスナックすまいるへと向かった。

「まあ、アリスちゃん！ほんとに来てくれたのね！早速、これに着替えてちょうだい！ちなみにもう九ちゃんは来てるわよ」

ふとお妙さんの横を見ると、ツインテールで可愛い格好をし、拳を口元に当てて少し恥ずかしそうにしている九ちゃんの姿があった。

初めて会った時はポニーテールで、最初は男の人だと勘違いしたが、よく見ると、いやよく見なくても九ちゃんはとても可愛いくて美人さんだった。

「いくら、お妙ちゃんの頼みでも……少し恥ずかしいな」

「あらゝ似合ってるわよ。本当は銀さんやうちのアイドルオタクにでも手伝わせようと思ったんだけど、やっぱり女の子がいいものね！……あらまあ、アリスちゃんもとてもよく似合っているわ。2人ともなんて可愛いのかしらゝ」

お妙さんは私と九ちゃんを交互に見ながら目を輝かせている。

「で、お妙ちゃん。僕らはいったい何をすればいいんだ」

どんな仕事をするのかよくわからないまま来てしまったので、それは私も聞きたい。

九ちゃんが質問をしたのと同時に、突然背後から人がやってきた。

「いけませんぞ若！こんな所で働くだなんて許しません！いいですか、キャバ嬢とは見ず知らずの男とマットの上でなんかヌルヌルになってもものすごい気持ちイイ……ゴフオッ」

「東城さん？うちはそういう店じゃないって何回言ったらわかるのかしら」

お妙さんの蹴りが見事に東城さんとやらのH I Tした。

「え……お妙さん。ごめんなさい。私そういうことするだなんて知らなくて……悪いけど帰らせてもらいます」

「オラ、お前のせいでアリスちゃんに誤解植え付けちゃったじゃねーかよお。私がいともそんなお下劣なことしてるみたいになっちゃったじゃんかよ。誤解とけよコラ」

お妙さんは東城さんの胸ぐらを掴みだした。

「あー！お妙さん、違うってわかりましたから、とりあえず離してあげてくださいっ」

なんだか東城さんが可哀相に見えてきたのでとりあえず私はお妙さんを止めることにした。

「しかし、若は何を着ても似合いますな。でもここはやっぱりグスロ……グフツ」

今度は九ちゃんの蹴りが東城さんにH I Tした。

「あのお、九ちゃん？東城さんとやらが可哀相なんですけど……」

「やだわ、アリスちゃん。あんなゴミクズのことなんか気になくっていいのに」

「そこのお嬢さん。なんて優しいんだ……私は感動しました。それに、若以上にゴスロリが似合いそうだと私は直感した。ここでぜひ、このゴスロリ衣装を着てはくれないだろうか。ほんとは若に着せようと携帯していたものだが……ガフツ」

ついにアリスの蹴り炸裂。

何この人。急に懷からゴスロリ衣装出してきたうえに、私にべたべた障ってきた。

気持ち悪いなあ、げしげし。

「なんだかんだでアリスちゃんが一番蹴りをいれてるわよ？まあ別にいいけど。それより東城さん、飲む気がないなら出てってください。営業妨害ですのぞ」

「私はただ若の样子が心配なだけであって……しかし、そこのお嬢さんに接客してもらうのも悪くないな」

そう言って私のことを指差す東城さん。

「東城。頼むから出て行ってくれ。僕からの一生のお願いだ」

「あ！若ったら！今、一生のお願いって言いましたね！？一生のお願いって一回しか使えないんですよ？！いったい若は、一生のお願いを何回使うつもりなんですか！この前も使ったの耳にしていますよ。もう若ったらお茶目……」

「いいから出てけええ！！！」

東城さんは九ちゃんに投げ飛ばされ、強制退場しました。

「さて、うざいのがいなくなったところで軽く接客の説明を2人にするわね。まず、お客様が何飲みたい？と聞いてきたら、こう答えなさい。ピンドンって」

「ピンドン？」

「ピンクのドンペリのことよ。これでがっばりお金が手に入るわよ」

ピンドン……

「そういえば、今日は大切なお客様が来るんでしたよね？」

「そうなのよ〜なんでも、央国星の皇子らしいんだけど……あ、来たみたいだわ」

お妙さんの目線の先を見ると、血色の悪い紫の顔色をした天人が立っていた。

頭の前からは触覚が垂れていて、柿の種のような形をした目でこちらを見ている。

「地球にはペットの散歩に来たんじゃがの〜、たまには地球人のこういう店にくるのもいいと思うてのう。余はハタ皇子じゃ。おぬしら、近こうよれ」

これが皇子なの？ バカ皇子なの？

「決して、ダメ皇子とかバカ皇子とか呼ぶんでないぞ、いいな」

うっ……

「わかりました、ハチ皇子」

「おい、おぬしわざとだろ。余はどこぞの市名のような名前ではないわ」

「さ、ダバ皇子。こちらに座ってくださいな」

お妙さんがハチ皇子を席へと誘導していた。

「だから余はハタ皇子じゃ！ハ・タ！なにダメとバカの頭文字とってダバ皇子って呼んでるんじゃない！」

「まあまあ、そんなことよりドンペリはいかがですか？」

「いや、ドンペリはいい……それよりメニュー表とか見せてくれんかのう」

「はい、どうぞ」

とりあえず、お妙さんは皇子の隣へ、私はその反対側の隣、九ちゃん是我的横に座った。

お妙さんの渡したメニュー表をちらりと見るが、ドンペリしかなか

った。

「おい！なんだこれは、ドンペリしかないじゃないか！」

「ハチ皇子、私、ピンドンって飲んでみたいです」

先ほどお妙さんに言われたことを実行してみた。

「ふざけるな！まともな接客もしなくて、何がドンペリだ！まあよい、ここは無難にフルーツの盛り合わせでも頼もうか。それぐらいあるじゃろ」

「花子ちゃん、フルーツの盛り合わせとドンペリ持ってきて！」

「だからドンペリは頼んでない！」

お妙さんに花子ちゃんと呼ばれた二つ結びの女の人、注文の品を取るため店の奥へと消えていった。

「グチグチうるさいのよ、その頭の触覚引きちぎってやろうか、ああん？いいからさっさとドンペリ飲めや」

笑顔で物凄いことを言っているお妙さん。
先ほどから大人しい九ちゃんの方を見ると、どうやらどう接客していいかわからない様子。

よかった、私と同じ気持ちなんだ。ここは、お妙さんに任せようかな……
キャバ嬢って、こういう口の悪さや強引さも大切なんだなあ、覚えておこう。

「だからドンペリドンペリしつこいんじゃない！」

でも、ハチ皇子が少しご立腹な様子。

そこへ、花子さんがドンペリとフルーツの盛り合わせを運んでやってきた。

右手にドンペリ、左手にフルーツの盛り合わせを持っている。

「お待たせしましたあ、ドンペリとフルーツの盛り合わせ……！」

花子さんがドンペリをテーブルに置いたところで、
花子さんは何かにつまずき、バランスを崩した。

そして宙に舞うフルーツの盛り合わせ。

「「あ……！」」

私とお妙さんと九ちゃんの声が重なった。

――フルーツの盛り合わせは、見事にハタ皇子に全部かった。

場に流れる沈黙。

「あ、あの……大丈夫ですか？」

一応、私は声をかけてみる。

「……だ、大丈夫なわけあるか！なんじゃこの店は、客の名前はろくに呼ばんわ、高い酒頼ませようとするわ、おまけにこんな仕打ちまで、もうこりごりじゃ！余は帰る！」

皇子はとても怒っていた。

「ごめんなさい。お帰りになるならせめて、ドンペリ飲んで金払ってから帰ってくれないかしら？」

「お主は反省の態度が見えんわ！その無口な奴らの態度も気に入らんが……お妙とかいったな？バカの1つ覚えみたいにドンペリドンペリと……何のつもりじゃ！」

やはり、こんな水商売なんかしてる地球人に、ろくなやつはいないんじゃない。

なんてことを言い出している。

お妙さんも悲しそうな顔になってるし、流石にこれは言いすぎ……！九ちゃんも横で、お妙ちゃんになんて事を！と呟いている。

私と九ちゃんは立ち上がろうとしたが、そんな私たちの様子を見てお妙さんは

平気よ、気にしないで

と口パクで言ってきたので、ひとまず気持ちを落ち着かせることにした。

「まったく、こんな汚い店に余が足を向けたことにも感謝してほし

いぐらいなのに。だいたいそんな仕事をしておるから、脳まで腐ってきてるんじゃないのか？」

あきらかに言いすぎな、お妙さんを貶すこの発言。

「地球人は、みすばらしいところで生活してるから考え方もきつとみすばらしくなってしまうたんじゃのゝやれやれじゃ。これだから地球人はろくなやつがないのう」

お妙さんだけに留まらず、

地球に住んでいる人達みんなをバカにする発言に私の中で何かが切れる音がした。

私の大好きな人たちが住むこの地球を、

私の大好きな人達を全否定されたような感覚がして物凄く腹が立った。

私は我慢が出来ずに、立ち上がった。手にはドンペリを持って。

そして私はバカ皇子の頭にドンペリを思いっきりぶっかけた。

「ちょ、そちょ、何をするんじゃ！」

「地球の、私たちの生活が、みすばらしいと言うのなら……私はみすばらしくたって構いません」

重たかった空気が、少しだけ軽くなるのを肌に感じた。

「……もうよい！余は帰る！」

そう言ってバカ皇子は足早に店を出て行った。
皇子が出てった後、沈黙は続いたが、しばらくして

「……アリスちゃん、ありがとう」

なんだか、胸がすっきりしたわ。なんて言いながらお礼を言うてるお妙さん。

だって、どうしても。

大切な人達がいるこの地球を貶されるのを、
目の前で友達が貶されているのを黙って見ているのなんてどうして
もできなかったから。

「……許せなかった」

確かに私たちの対応は決して良いと言えたものではなかったかもしれない。

でも、あそこまで言われる筋合いはない。

私の目から雫がぼたりと落ちた。でも、九ちゃんが

「なかなか、かつこよかった」

そのような強い心を持った女の子は好きだ。

なんて言いながら私の涙を拭ってくれたから、私はすぐに笑顔になった。

そして、3人で見つめあっていると、笑いが自然とこみ上げてきた。

「お妙ちゃん、元はと言えばうちのせいや。うちがフルーツぶちまけてしもたから……ほんまにすまんことをした……なんて謝ればいいか」

そう喋ってきたのは花子さん。

「気にしないで、花ちゃん。それに、私の接客態度も悪いところがあったんだもの。悪いのは私なのよ」

いいえ、悪いのはあのバカ皇子ですよ！と私が言うと、
それもそうね、とお妙さんは笑ったので私はなんだか安心した。

「お妙ちゃん、僕はそろそろ帰る。役に立てないどころか見てるこ
としかできなくてすまなかった……」

「あら、いいのよ九ちゃん。それに、九ちゃんやアリスちゃんがい
たから、私耐えていたようなもののよ」

本当にありがとう、と再びお妙さんはお礼を言ってきた。
九ちゃんが帰ったので、私も帰ることにする。

「お妙さん、私も、もう帰りますね」

「あらダメよ。アリスちゃんと花ちゃんには残ってもらわないと」

「え？ どうしてですか？」

花子さんも不思議そうにしている。

「だって、フルーツの盛り合わせとドンペリ……弁償してもらわなきゃいけないですよ」

え……？

「あの皇子に言い返してくれたことには、本当に感謝してるのよ。でもそれとこれとは別よ」

あ……マジですか。

けっきょくこんなオチなのね。

お妙さんの笑顔が怖かったので、私たちは素直に従いました。

あー、なんでドンペリかけちゃったんだろう。テーブルよく見たら水置いてあるじゃん。
こっちにしとけばよかった。

「ところでアリスちゃん。もうすぐお祭りがあるわね」

「お祭り？ ああ、そうですね。警備とか大変そうだな」

屋台見る暇とかあるのかな？

「花火、誰と見るかって決めているのかしら？」

「いいえ？」

「それなら……新ちゃんと一緒に見てはくれないかしら」

「新八君？ どうして？」

別に嫌ではないけれど、どうしてお妙さんは急にそんなことを言うてきたのだろう。

「新八君も良いですけど、私、お妙さんと花火見たいです！ あ、なんなら他の人も誘って皆で見ましようよ！」

皆で見る花火は綺麗で楽しいだろうな。でもなぜだかお妙さんは複雑そうな顔をしていた。

「残念ながら、私はその時間仕事なのよ。まあ新ちゃんを見てほし
いっていうのは、ただの私の独り言として聞いておいてね」

「は、はい」

「アリスちゃんは、自分が心から見たいと思う人と一緒に見ればいいわ。うちの弟が、アイドルからやっと身近な女の子に目を向けたから、姉としては応援したいのは当たり前だけど、アリスちゃんの気持ちを無理に変える権利は私にはないものね」

なんて言ってたけど、それってどういう意味だろう？

お妙さんの言っている意味はちよつとよくわからなかったけど、祭りの日に花火があるということはわかった。

「花火、かあ……」

誰と見ようかな。

今から少しだけ楽しみになってきた。

「アリスちゃん！今日もみんなで怪談話するんだけど、アリスちゃんも来る？」

「あ、ザキ！うん、行く」

「おい月宮、前回あんだけ騒いでたのに、懲りないやつだな……」

ザキと話をしていると、土方さんが呆れ顔でやってきた。

「なんだかんだで楽しかったんですもん。みんなの話し、怖いけど面白かったし。あ、土方さんも来ますか？」

「いや、俺はいい」

「……まさか土方さん、怖いのが苦手なんですか？」

「バツ、んなわけねーだろ！俺がそんな幽霊なんて非科学的なもの怖がると思ってんのか？そそそそんなのおかおかかしいだろ！」

「じゃあなんでそんなに慌ててるんですか？とりあえず、皆さん集まってるみたいなんで早く行きますよ？」

「だから俺はいいつつってんだろ」

「怖いのが苦手じゃないんですもんね？」

にこりと微笑んでみる。

「あー、怖くねえよ！怖くねえから行ってやるよ！！」

「わあ、良かった！」

人数は多いほうが楽しいもんね。

「……アリスちゃん、副長の扱いが上手くなったね」

山崎にぼそりと言われたけれどよく意味がわからなかったから、まあ、いっか。

「だから！なんで総悟の話は、急にリアルで細かい描写になるのー
……怖いというよりグロいんだけど」

私は顔面蒼白させながら総悟に訴える。

「最後の方は俺のアレンジでさア。ホラーっぽくスプラッターな感じにした方が面白いだろイ？」

「面白いとかそういうことじゃなくて……ほら、総悟がそんな話するから、土方さんなんて壺の中に顔突っ込んで、マヨネーズ王国がどうのこうの言い出しちゃったじゃん」

「あらら、土方さん。俺の話が怖かったんですかイ？まったく、他の隊士もいるってのに情けないったらありやしねえ」

「違っ！マヨネーズ王国の入り口があるって言ってるだろが！だいたいな、そういう話してて、お前ら呪われても知らねーからな！」

「そーいや、呪いと言えば……」

総悟は1枚の小さな紙を取り出した。

「俺が話しをしている間、目の前にこんな紙が落ちてきやしてねえ」

総悟が差し出した紙に注目する土方さんと私。紙にはこう書かれていた。

『今夜12時 土方死ぬ』

「タチの悪いいたずらかと思ったんですが、もしかしてこいつア……」

全く動揺を感じさせる様子もなく土方さんは言葉を返した。

「いや、あきらかにお前の字だし、これ」

しかし総悟も、土方さんの言葉に平然とした様子で返した。

「自意識過剰な人だ、そんなんじゃないローゼになりますぜ」

「タチの悪いいたずらだなオイィィ！」

総悟は逃げ回り、それを土方さんが追いかけるという事態になったので、

怪談話は強制終了となった。

「怖かったけど、今日もなんだかんだで楽しかったな」

山崎と少し雑談をしてから、私は部屋に戻ることにした。そろそろ眠たい。

時刻はいつの間にか深夜1時を回っていた。眠気が襲ってくるのも当然だ。

私は部屋に戻り、電気をつけようと手を伸ばした。

明かりをつけようと手を出したら……

真っ暗な中からニュツと手が出てきて、私より先に電気をつけた。

「!？」

自分は何もしていないのに、突如明るくなった自室。真っ暗闇に見えた確かな人の手。

周りを見渡してみるも、誰もいないわけで……

その時は、総悟がいたずらでもしに來たのかな？なんて、特に気にしないで、
布団を敷いてから明かりを消し、速やかに潜った。

翌日。

総悟に深夜のことを聞いてみるが、昨日は私の部屋には入っていないと言う。

嘘だ、私を怖がらせて楽しんでるんだ、なんて思ったが、ほんとに嘘をついているような様子はなくて、むしろ

「どうしたんでさア」

なんて心配したように声をかけてくる。

一応、近藤さんにも土方さんにも山崎にも、
他の隊士さん達にも聞いてみたが、誰もそんなことはしていないと
いう。

ザキなら、密偵できるし地味だし有り得るかな、なんて思ったけど
……

「俺がそんないたずらするわけないでしょ。沖田さんじゃあるまい
し……」

それもそうだ。

でも、だとしたら……

あの手は、いったい何だったのでしょ……

— 9 — (夏祭り前編)

「あ、近藤さん。おはようございます」

「おっ、アリスちゃん早いね」

「だって、今日は祭りの日じゃないですか」

いろんな屋台見て歩くの楽しみ。

「祭りの日だからって楽しみで早起きしたのか？ 祭りは夜からだぞ？ アリスちゃんは子どもだなガッハッハ」

まあそんなところが良いんだけどな、と近藤さんは付け足した。

……子どもと言われたことに少しだけカチンとなったが、ここは流しておこう。

「いや、実はですね……なんか天井裏にネズミがいるみたいで、走る音がうるさくてあまり眠れなかったんですよ……嫌だなあ、ネズミ……」

「あゝ、そりゃネズミじゃねえ」

私は首を傾げる。

「そりゃ、トシと総悟だ。どうせ総悟が、屋根の上で逃げ回るトシにバズーカでもぶっ放したんだろう」

「……」

そっちの方が子どもっぽくない？

バズーカ片手に追いかける総悟も総悟だけど、部下に追い回される土方さんも土方さんだ、と思う。

「それより、近藤さんは楽しみじゃないんですか？ お祭りですよお祭り！」

「ああ、お妙さんと店を見て回ったり、花火を見たり……手なんか繋いじゃったりしたら楽しいだろうな」

ゴリラはさわやかな顔で妄想を語ってきた。

ゴリやかだ。

「ちなみに、お妙さんは仕事でいけないそうですよ」

「えゝ!」

私がそう教えてあげると、ゴリやかだった顔が急変して、顔面真っ青になったまま固まってしまった。

「何浮かれてやがんだ、こういう大きな催し物があって江戸中が浮き足立つときには、攘夷連中も動きやすいんだ。俺たちがきっちり見張らねえとな」

「あー、やっぱり、私達真選組は、警備で祭りを楽しむ余裕なんかないと？」

「当たり前だ」

タバコの煙を吐き、土方さんは呆れたように言う。

ちえっ、銀さん達と、祭りを見る約束してたのにな。

『アリスちゃん、花火一緒に見ない？』

って銀さんが誘ってきてくれた時はとても嬉しかった。

いいですね、万事屋の皆さんと私で一緒に見ましょう！

と私が言うと、いや、俺は2人きりが……とかぶつぶつ言っていた

けど

これで、お妙さんに言われた通り新八君と花火を見ることもできる。
……なんて思ってたのになあ」

「あれ？ ザキ、何してるの？」

「何って、ミントンだよ。アリスちゃんも一緒にやる？」

「そーかそーか。じゃ、一つ手合わせ願おうかな」

「げ、副長……」

土方さんが物凄く恐ろしい顔で山崎のことを上から見下ろしている。

「おい山崎ィ。勤務中にサボりたあ、いい度胸じゃねーか」

「あ、いや、副長……これはですね……」

「いーからさっさとラケット構えろよ。俺はこの刀で相手してやっからよお」

「わー！ごめんなさいイー！！」

「おい山崎待ちやがれエエ！！」

山崎は走って逃げていたが、すぐに追いつかれボコボコにされていた。

……ふと後ろを振り向くと、朝と同じように元氣のない近藤さんの姿があった。

「……近藤さん、いい加減元氣出してくださいよ」

お妙さんが来ないことがそれほどショックだったのだろうか。

「ああ、アリスちゃんか……」

「局長のあなたがそんなんでどうするんですか！あ、ほら。あそこ
でチョコバナナ売ってますよ。私買ってきましようか？バナナはゴ
リラの好物ですもんね」

私は必死に近藤さんを元気づけようとするが、近藤さんは不満気に
していた。

「ちょっとお！なにそれ？俺のことゴリラだって言いたいのか！」

「違いますよ、近藤さんはゴリラじゃなくて、ゴリラに似た人ですから」

「ああ、そうか。それならいいんだ！」

ガハハと笑う近藤さん。なんかよくわからないけど、元気になったみたいで良かった。

「……で、総悟は何してるの？」

「見てわかりやせんかい？射的できア、射的」

総悟が銃を向けている先を見ると、そこには未だに山崎の上に乗っかっている土方さんの姿が。

「一発で当ててみせませア。発砲用意……」

「ちょ、それ流石にダメええ！！」

私はなんとか総悟を止めた。

「冗談でさア。それより、土方のことをかばうなんて気に入らねえや」

冗談に見えないんだってば。

「あそこに本物の射的屋がありやすねィ。アリスもやりやすかィ？」

「いや、私は見てるだけでいいや」

総悟が射的屋へと向かって行ったので私もとりあえず後ろについて行くことにした。

総悟は銃を構え、ぺろりと舌を出しながら、狙いを定め始めた。

「ここだ！」

総悟の放った弾は目的のものへと命中した。

「お！お兄さん、見事だね〜！」

そして総悟は商品を受け取り、それを私に渡してきた。
可愛いパッケージの、チョコレート菓子の箱。

「これ、お前にやりませア」

「え？くれるの？」

きよとん、とした顔でそれを受け取る。

私がありがとう、とお礼を言おうとした時。

「それでも食って、さっさと肥えちまえ」

「……」

やっぱりこいつに素直にお礼なんか言うの辞めよう。

「あ、どうせなら、あれ取って！あれ可愛い！」

私は気に入った商品を指差す。

「あんなのがいいんですかイ？ 全く、お前の趣味も変わってまさア」

いつも趣味の悪いアイマスクつけてる人に言われたくないよ。

どっかで見たことのあるような、あのぬいぐるみ可愛いじゃん。
宇宙怪獣ステファンとか書いてあるやつ、可愛いじゃん。

「いいからステファンとってよー！ ステファンー！」

総悟の腕を掴んで揺さぶってみる。

「へいへーい」

私にしがみつかれた状態のまま、総悟はいつも簡単にステファンを打ち落とした。

「わぁ、やったー！！」

私は自分が打ち落としたような気持ちいい気分になって喜ぶ。
そして店のおじさんは私にステファンを手渡してくれた。

「お嬢ちゃん、良かったねー！ こんなにかっこいい彼氏にプレゼント

してもらうなんて！いやあ、若いっていいね」

……へ？彼氏？

誰が？

もしかして、もしかしなくても、

総悟と付き合ってると思われてる？

総悟が彼氏？総悟が？

そう考えると、なんだか照れくさくなってきた。
自分でも頬が赤くなってきたのがわかる。

ちらりと横にいる人物の方へ目を向けると、
平然とした顔でこちらを見ていた。

どうやら恥ずかしがっているのは自分だけだということがわかり、
更に恥ずかしくなってきた私はその場を立ち去ることにした。

「違う！こんなドS野郎となんか付き合っていないしっー！」

「ちょ、アリス！待ちなせー！！」

その言葉を見殺し、私は走り続けた。

ていうかよく考えたら、警備だなんだの言ってたけど、みんな遊んでるじゃん。

私も、祭り堪能しちゃおう。銀さん達が来てるはずだから、銀さん探そっかなー

……いつの間にか先ほどまで恥ずかしがってたことを忘れて、私は気持ちを切り替えていた。

――

「……なんなんですか、いったい」

アリスは、俺が彼氏だと思われたのがそんなに嫌だったんですねイ。

……アリスと一緒に花火見ようと思ってたのに。

――

「銀さんいないな」

周りをきょろきょろと見回すが、

銀さんも新八君も神楽ちゃんも見つけることができない。

絶対に、来てることは確かなんだけどな。

すると突然、横から腕を掴まれた。

驚いて、掴まれた方向へと顔を向ける。

「何!？」

「驚かせてしまってすまない。そのまま気づかずに通り過ぎようとしていたのにな、咄嗟に掴んでしまった」

「ああ、松本さん！」

「松本じゃない、桂だ。松本とは誰だ……」

「ていうか、こんな所にいたら危ないですよ！祭りが楽しいのはわかりますけど、今、真選組がこの会場を見張ってるところですから、見つからないうちに逃げたほうが……」

「俺は、花火を上げにきたのだ。攘夷活動という花火をな」

私の忠告を無視し、桂さんは話し始めた。

「桂さん？」

「今から、花火大会の花火に細工をしにいく。これが上がったとき、幕府のやつらは思い知ることだろう。己の無力さを」

何をするつもり何だろう。

いくら私を助けてくれた桂さんといえども、流星に見逃すわけにはいかない。

私は顔をしかめ、ゆっくりと腰に下げてある刀に手をかける。

「心配するな。花火を細工するといっても、危険なことをしようというのではない」

「じゃあ、いったい何を……？」

私が不安混じりな顔で問うと、桂さんは微笑した後、こう答えた。

「『攘夷万歳』というメッセージが打ち上がるようにするだけだ」

……ああ、流石穏健派。

私は安心感を覚えたのと同時に、桂さんのことを　ばか　わ　い　い　と
思った。

「俺が、過激派の連中のようなことをするとも思ったのか？　いくら同じ攘夷志士とはいえ、なんでも破壊すればいいという奴らの思想には賛同できん。暴力で物言う時代は終わったのだ」

更に桂さんは言葉を続ける。

「テロが起これば、罪のない一般市民も巻き添えになる。江戸の街

がどうなろうが俺の知ったことではないが、そこで暮らす人々の幸せは別だ。目的を遂行するためとはいえ、無関係の者たちを巻き込んでも良いなどという道理はない」

言い終わったと同時に、桂さんは祭りを楽しむ人々の顔を見て、微笑んでいた。

ああ、やっぱり。

私、桂さんのこと好きみたい。

攘夷志士の桂さんでも、私達真選組には真選組の考えがあるように、桂さんにも桂さんなりの考えがあるんだ。

なんていうか、まっすぐな人だなーなんて思いながら桂さんのことを見つめる。

「ところでアリス殿。俺と一緒に花火を見ないか？」

あ、花火といえば……

「私、銀さん達と花火見るんだった！銀さん探さなきゃっ」

「銀時……?」

「ああ、なんなら桂さんも一緒に見ましょうか! 皆で見るとより一層綺麗に見えるんでしょうね」

すると、桂さんは私の後ろを見て、顔を歪めさせた。

「アリス殿と花火を見たいのは山々なのだが、いいか、人生には3つの坂がある。上り坂、下り坂、そして……」

「え? いきなり何ですか?」

「まさか だ! では、俺はこれにて失礼する。シーユー!」

「桂さあん?」

わけのわからないことを言って去っていったかと思えば、私の頬に突然冷たい物が当たった。

「ひゃあ!?!」

びっくりして声を上げると

「探しましたぜイ。ほら、これやりまさア」

声のした方へ顔を向けると、総悟が私の頬にラムネを当てていた。そうか、総悟の姿が見えたから桂さんは去っていったのか。

祭りと言えばこれだろイ、なんて言いながら総悟は自分のラムネに口をつけていた。

喉が渴いていたから、飲み物をくれたのは嬉しいけど……でも、射的でのお菓子やステファンといい、ラムネまで……いろいろなくれる総悟に少しだけ申し訳なくなってきた。

「なんか悪いね、こんなにいろいろ買ってもらっちゃうと……」

「買ってもらおう？何言ってるんでさア、このラムネも、さっきの射的も、全部お前の金ですぜイ」

「はい？」

そう言う総悟の手元には、私の財布が握られていた。

「あっ、いつの間に！」

「今頃気づいたんですかイ？ 全く、鈍臭いにもほどがありませんア」

「か、返してよー！！」

「嫌でイ」

私が必死に財布を奪い取ろうとするが、
総悟は手を高く上げ、私に奪われないように体を動かしていた。
その上、口笛まで吹いている。

よく見たら、金魚救いをしたのか、救った金魚が入れられた袋も手にしている。

私のお金で楽しみやがって！

私が財布を奪い返そうと必死にぴよんぴよんと跳ねていると、背後から声がした。

「なーにやってんだ、お前ら」

「あ、土方さぁん……」

「月宮も総悟も、いいか。俺らは遊びに来てるわけじゃねえ。少しでもおかしなマネしてる奴や怪しい奴を発見したら、即効囲めよ」

「わかってまさア、どんな些細な悪事も見逃しやしませんぜ」

そう言いながら総悟は、アリスの財布は天高く上げたままで、財布を持っている方とは反対の手で金魚の袋を持ち、目の前に掲げ水の中で金魚が泳いでいる様子をじっと見ていた。

「おめーはその小さな水ん中でいったいどんな悪事を見つけるつもりなんだ？」

「共食いとかですかね？」

「月宮も真面目に答えんな」

「とりあえず死ね土方アアア！」

総悟は土方さんに向かって突進しだした。

「おめっ、とりあえずって何だぁぁ!!」

なんだかりアルな共食いが始まったな、
なんて思いながらアリスはその様子を見つめる。

「それにしても土方さん、俺達だってちょっとぐらいは祭りに参加
してる気分を味わいたってもんでさア」

「もう十分味わってるだろ、お前は……ふざけるのもいい加減にし
ろよ総悟、甘えた考えは捨てろ」

本格的にキレ出しそうな土方さんを、総悟は面白くなさそうに見つ
めている。

「俺達真選組はな、祭りを楽しむなんてことは、これっぽちも考え
ちゃいねーんだよ。世の中の整った状態を保つため、あえて己の楽
しみなんざ捨てちまえ」

土方さん、そこまで真選組に誇りを持っているんだな。祭りだなん
だと浮かれていた私だけど、やっぱりちゃんとしなきゃ。

と、感心していたその時。

「おーい、トシに総悟！アリスちゃんも。どうだ、そっちの様子は？」

と、現れた近藤さんは、右手にたこ焼き、左手にはチョコバナナとりんご飴を持っていた。

「いや、楽しそうだなアンタはアア！！」

土方さんの突込みが決まった。

土方さんが近藤さんに軽く説教をしている。
どっちが部下なんだか……と少し呆れる私。

「あれ？アリスちゃん、こんなところにいたのー？」

「銀さあーん！！」

わあ、やっと会えたあ、と私は思わず笑みがこぼれてきた。

「え？何？そんなに銀さんが恋しかったの？いやあ、銀さん照れち

やうじゃねえか……ん？髪飾りずれてるぞ、直してやるよ」

そう言って銀さんが私の頭に手を伸ばし、花の髪飾りに触れた。

……銀さんの胸に近い。目の前にあって、抱きしめられてるみたい。

ほれ、終わり。と言われたものの、

未だに銀さんの胸は目の前にあるわけで。少し戸惑っていたその時。

一瞬にして銀さんが視界から消えた。

「って、あれ？銀さんんんん！？」

「旦那……何してるんですかイ」

銀さんが視界から消えた理由は、総悟が銀さんを蹴り飛ばしたからだった。

「ちょっと沖田君なに？銀さんはただ髪飾り直してあげてただけじゃーん」

「ちょっとこっち来てくだせエ、旦那」

「はあ？ ちょっと沖田くん？」

なんだか、また騒がしくなりそうだなあと呑気に2人の様子を見ていたら、後ろから声がした。

「なんだか知らないけどやかましいねえ、祭りぐらい普通に楽しめないってのかい、銀時」

「ソウダ、オ登勢サンノ言ウト通りダクソ天パ」

「いや、だから俺髪飾り直してあげてただけなんだけど……ってか、なんでババア達がここにいんの？」

「こんな日ぐらい、店は休みにしようと思ってねえ。というかお前はこんなところうついている暇と金があるならさっさと家賃を払いな」

ん？ 店？ 家賃？

「もしかして、お登勢さんにキャサリンさんですか？」

「なんだいこの子、あたしらのこと知ってるのかい」

「はい、銀さんから聞いたことがあるので」

万事屋で銀さんと雑談した時に、

1階にはババアと化け猫が住んでるって聞いたことがある。
たまという名前のからくり家政婦もいるらしいけど、ここには来て
ないみたいだな。

「ナンダコイツ、変ワツタ顔シテルナ」

キャサリンさんには言われたくない。

その後も、なぜだか自分の方が可愛いだのお前はぶさいくだの言われた。

なんで初対面でこんなに言われなきゃならないんだ？と思っていた
ところ

「ソノ隊服見ルト真選組ラシイケド、オ前ソンナトコロデ働イテイ
テ大丈夫ナノカ？」

「え？はい」

そんな所ってどういう意味だろうと思いつつ、

憎まれ口叩いてるキャサリンだけど、ほんとは良い人なのかな？なんて思ったりした。

さりげなく心配してくれたし。やっぱ、女の私が真選組って、変なのかな？

早く、周りから認められる隊士になりたいなあ。それでも私、一番隊の副隊長なんだけどな。

――万事屋の下にあるスナックお登勢。

スナックってなんだか入りづらいし、

どんな人がいるのかわからなくて戸惑っていたけど、

お登勢さんやキャサリンを見て、どんな人たちがいるのか知ることができたし、

今度行ってみようかなーなんて考えていた。

「ねえ、アリスちゃん。こんな奴ら放っておいて俺と花火見に行こゝ？」とおきき場所があるんだよね」

「え、あつ！」

私はいきなり銀さんに手首を捕まれたかと思うと、土方さんが私の反対側の手を掴んでいた。

「おい万事屋あ、こちら勤務中なんだよ。というわけでこいつを連れてかれちゃ迷惑なんだ」

「え？何々？もしかして土方君嫉妬？そんなんじゃモテねーぞ」

「バツ！違えーよ！それに花火が打ちあがる時が、一番危険なんだ。というわけで俺ら真選組は固まって見張ってなきゃならねーんだよ。年中暇なお前と違うんだよ俺らは」

これで流れるに、月宮と一緒にいれて、
花火も一緒に見ることができるしな。……って、何考えてんだろな俺。

「あん？誰が年中暇だって？やんのかコノヤロー」

そう言って銀さんは私の手を離し、変わりに木刀を掴んだ。

「上等だコラ」

土方さんもそれに対抗して抜刀寸前。

銀さんも土方さんもどうして会うといつもこうなんだろう……

「しかし、あんたを見てると若い頃のあたしを思い出すねえ。そのちやほやされ具合とかが……あたしも過去にはねえ……」

突然そんなことを言ってきたお登勢さん。

「お登勢さんに過去なんてあったんですか？」

「さらっと失礼なことを言うね、この子は」

どの辺がちやほやされてるように見えたんだ？
というか、お登勢さんは過去にちやほやされてたの？
うーん、想像つかないな……なんて考えていると

「コノ小娘、ナカナカ言ウナ。オ登勢サンニ過去ナンテナイニ私モ一票入レルヨ」

「おい、キャサリン。それはどーいう意味だい」

お登勢さんとキャサリンはなんか揉め始めた。

ふと総悟の方に目を向けると

「旦那ァー、いいぞもつとやれーそして土方死んじまえー」

近藤さんは、お妙さんがいない祭りなんて祭りじゃない、なんて言い出している。

それに山崎は地味だし。

……ってか山崎いたんだ。

「ちょっとザキ、これ持ってて」

「え？」

私は山崎にお菓子の箱とステファンを渡し、
もう一度祭りの店の中に潜り込むことにした。

花火までまだ時間はあるし、結果的に見回ってることになるからいいよね。

そうして私は騒がしい人たちに背を向け歩き、再び店を見て回ることにした。

ザキが、俺も一緒に行くよ！とか言ってたけど

ザキは荷物持ってそこで待ってて、すぐ戻ってくるから！
と言ったら不満気な顔をしつつも了承してくれた。

ある程度歩いていると、見たことのあるグラサンが店を開いていた。

「あら、長谷川さんじゃないですか。久しぶりですね」

「おおー、いつかの嬢ちゃんじゃねーか！どう、焼きそば食べてく？」

そう言われ、長谷川さんの屋台は焼きそば屋だということに気がつく。

「じゃあいただきますね……それにしても、なんだか生き生きしますね。楽しそうに焼いてますね」

「だって、職人の手が止まっている屋台には客が来にくいだろう？それに俺は、自分自身が商品作って客と金銭のやり取りするこの独立独歩がしつくりくるんだ」

なるほどねえーなんて感心していると、横からひよっこり神楽ちゃんが見えた。

「オイ、偉そうに語ってんじゃねーぞマダオのくせに。それに相変わらずもっさりした焼きそば焼きやがって」

「ああ！ちよつとちよつとオ！？何勝手に食べてんの！？」

「ところで前から思ってたんだけど、マダオってどういう意味？」

「マジでダメで根性なしのおっさん、略してマダオ」

焼きそばをもさもさ食べながら神楽ちゃんは答えてくれた。

「なるほど、マアいやだとあきらまれるぐらい墜落した愚か者、略してマダオね！」

「いやいや、どっちも違うから！ってか嬢ちゃん、俺に恨みかなんかあるわけ！？」

神楽ちゃんは、屋台に出ていた焼きそばを全て食べ終え、不満げに次の言葉を言った。

「マズくてダシの効いてない焼きそばもっとおくれ、略してマダオ

」

「マズいなら食うなよ！つーか焼きそばにダシって何！？ていうかもう全部食われちゃったからねーよ！」

「あつそ、じゃあもうテメーに用は無エ、あばよ」

そうして神楽ちゃんは手をひらひらと上げ、祭りの人ごみの中に消えていった。

つてオイ！食い逃げだぞ！待てよー！

と半泣きで叫ぶ長谷川さんが不憫に見えたが、でもマダオだから仕方がないか、と私もその場を去ることにした。

――その後、私はすぐに新八君を発見した。

「あれ、アリスさん？1人ですか？」

「うん、新八君も1人？」

「ええ、銀さんと来てたんですけど、いったい何処にいるんでしょうあの人は……」

私は銀さん達のいる場所を教えてあげた。

「じゃあ僕はそこに行きます。アリスさんも一緒に行きましょうよ！真選組の皆さんもいるんでしょう？」

「ええ、そうしたいところなんだけど……ちょっと、人ごみに酔っちゃったみたいで」

私は軽く口元を押さえる。

「え、大丈夫ですか！？だったらなおさら、皆のいるところへ戻らないと！ほら、僕が支えますから」

「気持ち嬉しいけど、とりあえず座りたいの……それに、ちょっと1人になりたいし……」

「そんな顔色の悪いあなたを、1人にさせるなんてできませんよ。僕心配です」

皆のところに戻らなくても、だったらせめて僕とどこかで休みましよう、と言ってくる新八君。

「私のことは気にしないで、先に行つてて……それに花火までには戻るし」

「でも……」

新八君の心配してくれる気持ちは嬉しいけど、
今、軽く吐きそうな気分だし……流石に廁についてこられるのは恥ずかしい。

「大丈夫だから、ね？ 少しでも1人にさせて……」

そんな私の気持ちを察してか、新八君は眉を八の字にしながらも了承してくれた。

「調子が良くなったら、花火一緒に見ましようね？」

私はそれに答えるように微笑んだ後、人の多い祭り会場から離れるべく歩いた。

……吐き気はおさまったけど、とりあえずベンチか何かに座って休みたいな……

ベンチを求めて歩いていたら、ちょっとした高台にベンチがあるのを発見し、

ひとまずそこに座り込んだ。

祭り会場からは、離れているようでそう離れていないような場所。祭り会場の騒がしい音楽等が、微かに聞こえてくる。

少し座り込んだだけで、すぐに気分は回復した。

こんなに早く治るんだったら、

新八君と一緒に皆のところに戻っていればよかったかな。

……でもせっかく来たから、ベンチに腰は下ろしたままにしている。

ここで花火見たら見晴らしいのかな？なんて思いながら空を眺める。

ドオン！！

すると、花火が始まってしまった。

「ありゃりゃ、始まつちやったー……」

ほんとは皆と見たかったけれど、
花火中に移動するのも少し面倒だったので、私はこの場で花火を堪能することにした。

「わぁ、綺麗！」

花火を見上げ、思わず私は呟く。
ここは花火がよく見えるし、1人で見る花火もこれはこれでいいのかもしれない。

今日は、いろんな人に会ったな。

まず桂さんに、銀さんにお登勢さんにキャサリン。
長谷川さんに神楽ちゃんに新八君。
お妙さんや九ちゃんに会えなかったのは少し残念だけど。

そういえば、総悟にステファンとってもらったな。

……私のお金だけど、プレゼントには変わらない。あれは私の宝物になりそうだ。

同時に真選組の皆の顔も思い出し、

打ちあがる花火が今日会った人々や、いろんな人の顔に見えてきた。

私は穏やかな顔で花火を見上げ続ける。

花火って、いろんな色で輝いていて綺麗だな。

「私も花火みたいになりたいなー……」

きらきらと輝いて、皆のことを楽しませてくれる花火。
大きな空から華やかに人々の様子を見守っている花火。

皆に好かれる花火。

私は真選組の花には、なれているのだろうか？

いつだったか、土方さんに言った言葉をほんのりと思い出していた。

このまま花火を見続けていたいという気持ちもあったけど、
花火と皆の顔が重なってきて、皆の本当の顔が見たくなってきたの

で、

私はさっきの場所へと戻るために立ち上がった。

立ち上がったと同時に、さっきから感じていた気配が濃くなったのを肌を感じた。

……ああ、今日は本当にいろんな人に会う。

「お久しぶりですね……」

私はゆっくりと振り向きながら苦笑いを浮かべ告げる。
そしてさりげなく刀に手を添える。

振り向くと、前会った時と同じく、
嫌な笑みを浮かべながらこちらを見ている男が立っていた。

「ククク、でけえ花火がやけに眩しいじゃねーか」

暗くてよくは見えなかったが、
相変わらずの派手な着崩した着物と、片目にしている包帯に、不気味な表情。

また会うことになるだろうとは思っていたけど、
まさか祭りの日にこの人に会うなんて思ってもいなかったから、完

全に油断していた。

「いつから、いたんですか？」

私は警戒しながら言葉を続ける。

「なあ、花火みたいになりてーんだよなア……？ククッ」

質問には答えずに、男は笑いながら言葉を返す。

どうやら私の独り言を聞いていたらしい。

「そんなに花火のように散りてえなら、今すぐにこの場でてめえの命の灯火ってやつを、吹き消してやってもいいんだぜ？」

なア、真選組一番隊副隊長の、月宮アリスさんよお——

そう言った瞬間、男は物凄いスピードで私に斬りかかってきた。いつでも抜刀できるよう手をかけていたのに、そんな余裕はなかった。

やっぱり、こいつ私のこと知って——と思った瞬間には、私の頭の近くで、耳の近くで、何かが斬れる音がした。

ああ、どこか斬られちゃったかな……

どこか冷静な自分がいる中、物凄く焦っている自分もいる。

なんとか平常心を保とうとしながらも、
私は斬られたであろう頭をゆっくりと手でおさえた。
しかし、痛みを感じない。

斬られたのはどうやら、頭の花の髪飾りだったようで、
私と男の間で髪飾りの花びらがひらひらと風に揺られていた。

ああ、せっかく銀さんに買ってもらったのに。
直してもらったのに。

「さア、さっさと刀抜けよ、アリス……ククッ。早くしねえと、
今度は髪飾りだけじゃすまねえぜ？」

私は刀を抜き、一気に男に斬りかかろうと刀を振り上げた。

「クッククク、そうこなくっちゃなア……!!」

静寂な夜の空気とは裏腹に、鈍い刀のぶつかり合う金属音が響きあったが、

それは花火の大きな音によってかき消されていた――

花火は相変わらず、せわしなく綺麗に咲き続けていた。
咲いては散り、咲いては散りの繰り返し。

私は、こんな所で枯れるわけにはいかない――

その頃。

「おい土方君よお、アリスちゃん何処に行っただよ？」

俺はアリスちゃんがないことに気がつき、土方君との争いを中止する。

「ああ？……そういや姿見えねーな」

「ああ、アリスちゃんなら俺に荷物預けて、また祭り会場の中に入
っていききましたよ」

「はあ？　ったくアイツは……おい山崎イ、なんで黙って行かせてん
だよ、あ？　勤務中だって何回言えばわかんだよ」

「え？　いやあ、すぐに戻るって言ってましたし。それに副長も旦那
と遊んでるじゃないですか……」

「なんつでこいつと俺が遊んでるように見えんだよ、山崎イてめえ
コノヤロっ!!」

「ぎゃあアア！　ふ、副長！　やめてくださいイイ!!」

土方君がジミー君を殴っているのを横目に、俺は考え事をしていた。

祭り会場、ねえ……

人も多いから、1人でも大丈夫だろうか……

ドオン！！

あー、もう花火始まっちゃってるじゃん。

せっかくアリスちゃんと思っただのに。

ジミー君の言っただ通りなら、もうすぐ戻ってくるのかな？

しかし、なんでだ……

さっきから胸騒ぎが止まらねえ。

アイツか、アイツに会っちゃったからなのか？

考え事をしていた顔を上げて前を見ると、新八と神楽がこちらに向かってくるのが目に入ってきた。

「銀さん！ここにいたんですね！いやあ、さっきアリスさんに会ったんですよ」

「何？アリスちゃんに会っただあ？そのアリスちゃんは何処にいたんだよ」

「それがですね……体調が優れなかったそうで、1人になりたいって言ってたので、静かな場所にでも向かったんじゃないですかね」

ちょっと心配ですけど、花火は一緒に見るって言ってもらえたし、もうすぐで戻ってくると思いますよ。あ、でももう花火始まっちゃってますね」

そんな呑気なことを言いながら夜空を見上げている新八の肩を俺は思いつきり掴んだ。

「バカヤロウ！！なんで、なんで1人でどっか行かせたりなんかしたんだ！！」

「え、だって、どうしても1人になりたい様子でしたし、無理に付き添うのも迷惑かと思ったんですよ……ていうか銀さん痛いです、離してくださいよ！」

新八の言葉とは逆に、俺は肩を掴んだ手を離すどころか無意識に力を強めていた。

「ちょっと、銀ちゃんどうしたアルか？いつもと感じが違うネ」

困り顔で俺の顔を覗き込んでくる神楽だが、今の俺には神楽の言葉なんか耳に入ってこねー

だって、アイツが、アリスちゃんが……

アイツとアリスちゃんが……

――――

数十分前。

「高杉……何で、てめえがこんな所にいやがんだ？」

「なあに、祭りが盛り上がりそうだったんでな、ちよいと見物に寄ったまでだ」

人が賑わう祭り会場の中、俺と高杉は出会った。

「ていうかよお、自分が指名手配犯だっていう自覚はないわけ？」

「俺アそんなことどーでもいいんだよ。自分のやりたいことをやりたいようにやる。それだけだ」

こいつ、何を企んでやがるんだ……？

「最初はつまらん祭りだったんで、出て行く気はなかったんだが……ククク、よく見りゃ面白い出しもんが出てるらしいからな」

「あア？出しもんだあ？」

何のことを言ってるんだこいつ、と首を傾げる俺に対しアイツはこう言ってきた。

「それで、ちよいと様子を見に来たってわけさ。真選組の、月宮アリス……ククッ」

こいつ、アリスちゃんのことを知って——！？

「おいてめえ、アリスちゃんに何する気だ。何企んでるのかは知らんが、てめえの好きなようにはさせな……ってオイ!？」

いつの間にか高杉が消えたと思えば、

遠くの人ごみに混じりながらこちらを見て怪しい笑みを浮かべていた。

こいつはヤバイ、と俺は一刻も早くアリスちゃんに会うために走り、やっと会えたアリスちゃんは無邪気な笑顔で迎えてくれて、高杉とは接触していない様子だったので安心した。

それなのに。

アリスちゃんはいつの間にかいなくなっていて。

しかも1人で祭り会場を離れた、だと？

アリスちゃんがなくなったことにすぐに気づかなかった俺も悪いが、

今はいちいち悔やんでる場合じゃねえ!!

俺は、悪イ、と新八に一言謝ったあと、全速力で走った。

何もなければいいけど、この胸騒ぎはなんなんだコノヤロー

今、アリスちゃんは何処にいるんだ――？
高杉の奴は何を考えてやがるんだ――？

「銀さん、様子が変でしたね。どうしたんでしょう……」

「銀ちゃん……」

銀時が去って行った方向を、万事屋の子ども達は心配そうに見つめていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9002y/>

真選組にて咲く花は

2011年12月7日00時45分発行